
雨がやまない

秋山五和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨がやまない

【Nコード】

N4284V

【作者名】

秋山五和

【あらすじ】

雨の降る日、久しぶりに溝口調査事務所に来訪者が現れた。その女性は言った。

「私を助けて下さい。いつも、誰かが、私を見ている」

沢村愛。

不安と恐怖に彼女はおののいていた。救われない彼女の瞳には、弱りきった希望が輝いていた。

探偵、溝口洋介にとってはよくあるストーカー処理の仕事だった。しかし、時を同じくして暴力団構成員が殺害されるという事件が発生する。

その裏にうごめくのは、勢力拡大に慢心する本家白神会と、その下で暗躍する下部組織の存在だった。

雨の止まない日に舞い込んだ依頼が、思わぬ形で溝口を追い詰める！

まがまがしく乱れる欲望が集うその先に彼が見るのは、愛か、妄執か――

昨夜落とし込んだアルコールの浸透が、彼を深い眠りへといざなっていた。

胸焼けを起こしそうな甘ったるい香り。ジンから発せられるものだ。下戸だった。だが、呑みたかった。最終的にケリをつけたジン・ロツクの芳香がまだ、鼻に焼きついたまま彼は落ちた。

「お前にしちゃ、呑むんだな」

「悪いか。そういう日があってもいいだろ」

友人も驚いていた。自分から酒の席に誘ったことと、その自分が思いのほか飲んでいる事に、その友は半ば奇異な面持ちをしていた。

「お前はカフェとか、そういうところじゃないのか」

「夜にそんなところ行つたて、仕方ないだろ」

「珍しいな。お前が」

「ムードの問題だ」

交わした会話が、夢の中で反響していた。
午前三時だった。

雨音に目を覚ました。わずかに開けていたベランダ窓から洩れるその音は、激しかった。マンションの駐輪場の屋根に弾ける雨粒の音がことさら大きく響いている。身体に不調はどこにも感じられなかった。

「喉が渴いたな」

起き抜けそう言つて、溝口^{みぞぐち}洋介^{ようすけ}はベッドを降りた。

キッチンへ向かいコップに水道水をくべると、それを一気に飲み干した。カルキのまとわりが喉に気持ち悪く、冷蔵庫からミネラルウォーターを出し渋つた事を後悔した。

カーテンを開く。窓外に広がる夜の世界を無数の雨が落ちてゆく。はるか向こうのビルの赤色灯も曇つていた。無論、月明かりなど無い。でつぶりした鉛色の雲が夜空一面に広がつていた。暗い、暗い夜だった。

憂いながら窓を閉める。カーテンも閉じた。部屋は少しだけ静かになつた。

ベッドへ戻り、再び深い眠りへつく。数時間後には、事務所にいなければならないのだ。

午前八時。まだ雨はやんでいなかった。
道中の地下鉄の湿気と臭いがまだ肌に、頭に、染み付いているように溝口は事務所のシャワーを浴びていた。

溝口調査事務所の従業員は所長兼調査員の溝口と、『一応』の事務所の顔として勤める、受付^{あすま}の東沙希^{さき}しかない。規模の小さい事務所であるため、仕事の依頼も通常の興信所や調査会社に比べればはるかに少なく、事実、一週間ほど溝口も沙希も仕事らしい仕事をしていない。

この間など、あまりにも情報の少ない匿名依頼がドアポストに入られていた。怪しすぎだ。世間からはおおよそ何でも屋のように思われているのだろうか。しかし自分の事務所はきちんと調査機構

として機能していると溝口は自負している。依頼は面と向かって受けるべき、というささやかな社訓には忠実であるべきだ。

沙希はあと三十分もすれば出社して来るだろう。シャワーを浴び、すっきりした気持ちでコーヒーを淹れる。出来るまで新聞を読んでいた。そんな事をしているから、彼はたまにここを自宅と勘違いしてしまうのだ。自由の利きすぎる職場も考えものだと、沙希と冗談を言い合っていたばかりだ。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

沙希が事務所の扉を開きながら言った。溝口は初めのコーヒーを飲んでいた。

「雨がすごいですね。ほんと」

「昨夜からずっとだよ。時期でもないのに珍しい」

「寒い、寒い……」

沙希は鞆をロッカーにしまいながら扉の内側の鏡を見て眉間にしわを寄せている。ボブカットの黒髪が湿気に広がっている事を鬱陶しく思っているらしい。

その様子を横目で眺めながら、溝口は言う。

「コーヒーが出来てるよ」

「気が利きますねー。それと溝口さん、またシャワー使いましたね。」

石鹸の香りがします」

「本当ならコーヒーは沙希ちゃんの仕事だろう。シャワーは所長特権」

「ふつるい考えしてますなー。まだ二十五でしょうに」

「最近近いのもそのせいかね」

そう言いながら、溝口がお手洗いに立ち上がる。正直不安だった。年の事も、このままで良いのかという現状と将来の事も。沙希は『まだ』と言ってくれた。その言葉を初めて聞いたのはいつだったか。思い出すのもたやすい。彼女なりの氣遣いに甘えてここまで来たとは考えたくない。

自分なりの信念で走ってきた思いもあるが、現在の不安を考慮すれば、その信念もエゴとして処理せざるを得ないような気がしてきた。新しい方針を打ち出すしかないのか。最近の余暇が、溝口の頭にそのような懸念ばかりを否応なしに発生させている。

おそらく、今日も仕事はないだろう。まして、この雨だぞ。溝口がオフィスに戻って来た。

「沙希ちゃん。どうやら今日も事務処理かな。過去の仕事を整理しよう」

「ああ、それなら昨晚終わらせましたよ」

「デキた子だ」

苦笑せずにはいらなかった。いよいよすることが無い。

その時だった、事務所のインターフォンが鳴った。三階のテナントに入っている事務所への呼び出しは、まずは一階のロビーから行われ、来訪者は事務所側のオートロックの解除で建物へ入る。

「勧誘ならいつものように」

ごまかせ、という事だ。

「もう口癖ですから」

そう言っ、沙希が受話器を取った。

はい、はい、と対応していた。いつもならこの辺りで『いつものごまかし』文句が挿入される・・・はずだった。

沙希は電話機のボタンを押すと、三階まで、とその相手に告げた。そして受話器を下ろす。その様子を二杯目のコーヒーを飲みながら眺めていた溝口は目を丸くして腰を上げた。

「沙希ちゃん今の」

「仕事です」

久しぶりの来訪者が事務所の扉を跨いだ。溝口と沙希はその姿に驚いた。

「あの、溝口調査事務所・・・こちらですよね？」

彼女は弱々しい瞳をたたえ、そう呟く。顔に雨水が滴っていた。しかし身体の震えは、そのせいではないように思われる。傘を畳みながら、女は返答を待っていた。

「はい。こちらが溝口調査事務所になります」

沙希が慣れた口調でそう言うと、受付カウンターの後ろにあるロツカーからタオルを一枚取り出した。

溝口も立ち上がり、ミニキッチンから新しいコーヒーカップを持ってきた。それにコーヒーを注ぎながら言った。

「さあ座って」

女の着ているアーガイルのセーターの赤い部分の模様が、水に濡れ濃くなっている。ブーツにも泥の汚れがはねていた。

「こちらをどうぞ。寒かったですよ」

沙希がタオルを手渡す。柔軟剤の香りがほのかに香る一品だ。女はこくりと頷いてそれを手にした。

「こちらもどうぞ」

次に溝口がコーヒーを差し出す。

「あ、ありがとうございます」

「気にしないで」

「いただきます」

「何だか今日は寒いですね。暖まって下さい」

沙希がそう言った。女はにこりと弱々しく笑うとカップをテーブルに置く。

女は一呼吸置くように胸をゆっくりとなでおろす。自然な動作だった。わざとらしさは無い。対面に座っていた溝口はその様子をじっと眺めていた。

やがて彼女と目が会った。

「今日はどのような？」

女の程よくくぼんだ目元には、化粧では表現しきれない『陰り』がうつすらと浮かんでいる。今日の気候のようにじっとり、ではなくしっとりとした雰囲気を漂わせているその風貌は、彼女の若さだけが原因ではないように思われた。

「あの、私こういう所初めてで・・・各種調査とありましたから・・・」

女の前髪が束になってはらりと下りてきた。傘をさしていても雨水に晒されている。強さが増していたのだろう。

「ええ。基本的な調査業務はカバー出来ます。行動調査、信用調査、失踪調査など。まあ、うちは小さいですからある程度の小回りは効きます」

『ある程度小回りは効く』、溝口は売り文句をさり気なく挿入した。調査員が溝口一人である以上、一度に行える調査業務は一件に限られる。貧乏探偵に成りえそうだが、これがなかなか良いサイクルを作り出す。一件の依頼に集中することで確かな結果を生む。更に、依頼人との信頼関係も築きやすい。

収入に関して言っても、彼の貯金とこの職業独特の料金システム

のおかげでさほど貧窮することはない。

正社員の沙希にも、それなりの給与を提供出来ている。彼女は昨年今年三度目のイタリア旅行に行っていた。

「そしてうちは相談に関して言えば料金は発生しません。ですので、今からでもお話はおうかがいますよ?」

「本当ですか? ……じゃあ」

安堵のため息のようなものを女が漏らした。沙希から受け取ったタオルで額をもう一度拭く。そして溝口に向き合つと、口を開いた。

「私、沢村愛と申します」

「沢村さんですね。今日のご相談で」

溝口はジャケットからメモ帳を取り出して、それに沢村愛、と書いた。久しぶりにこのメモ帳は開かれた。

「はい。実は最近……その、感じるんです」

受付カウンターに座る沙希はぴくりとした。

依頼人のもたらすこの手の雰囲気。この手の表現。そして、その中に内包される、ある一つの感情。それら全ての感覚を沙希は知っている。彼女は背筋に寒気を走らせ、コーヒーを口に含んだ。ぬるくて、たまらなかった。

「恐怖ですね」

溝口が促した。

そう、恐怖だ。沙希は顔を下げた。

愛は、先を促してくれた溝口になんとも言えぬ瞳をささげ、頷く。

「はい……まさしく……恐怖なんです」

「どのような恐怖か……わかりますか？」

溝口はメモ帳の愛の名の隣に、素行、ストーカー、と現時点で思い当たる調査方針を推測して走り書きした。

「……私を見てるんです。誰かが、私を！」

たまらず言った、という感じだった。不安、不満、そして恐怖。人間のストレスは大なり小なり必ずいつかは爆発する。

溝口は、メモのストーカーの記入に丸をした。

「私を助けて下さい。いつも、誰かが、私を見ているんです」

愛は懇願した。両の目が潤んでいた。室内に一瞬、間が生まれた。静寂の中に雨音が響く。湿り、濡れてゆく町並みが窓外に広がる。探偵はそつとその方に顔を背ける。

救いを求める人間の瞳の色を、溝口洋介は知っていた。

沢村愛がその『恐怖』に初めて気がついたのは、三ヶ月前の事だった。もつとも、その時点では、恐怖という感情はそこにはなかった。

それは『視線』だった。雑踏の街角。昼下がりの人波の向こう。それは居た。

グレーのジャケットに白のシャツ。頬はこけ、後ろ髪が首筋からはねていた。ニットの帽子が表情の視認を邪魔する。

愛はその姿をじつと眺めていた。視線がニットの影から愛をずっと捉えていたからだ。誰だかわからない。しかし目が離せない。

愛はその人物の視線はただ、気のせいだと思っていた。

トラックが目の前を通過した。次に通りが開けた時、その姿はなかった。やはり、気のせいだったのだ。

「初めがそれでした」

愛は最後の一口に口をつけて言った。コーヒーの苦味が舌を撫でる。

「一瞬の出来事だった。しかし、何故か沢村さんを引き付ける光景だった」

溝口が言った。愛が頷く。カウンターに座る沙希は遠い目で会話を耳を傾けていた。

「ただの偶然、私の考えすぎかと思いました。でも後日、通勤中にその人を見かけた」

ニット帽。ジャケット。シャツ。同じ雰囲気。それらが彼女に悟らせた。あの時と同じ人間だと。

「私を見ていると確信しました」

「そしてその時——」

「怖い。そう思いました」

愛は言い切る。顔を背けた。濡れていた前髪も今では乾き、ばらばらと簾すだれのように広がっていた。

彼女の大きな瞳が溝口を捉えた。そこには潤いが満ちている。理解されないが故に行き着いた、希望への切望。

「三回、四回、アイツは何度も私の前に現れる。道ですれ違った？ 喫茶店で隣に座った？ いいえ・・・アイツはただ私を遠くから見ていただけ・・・すれ違っても、隣に座っていたわけでもないの」

ストーカー被害において恐ろしいのは、『誰かが自分を見ている。つけている』という確実な外的ストレスだけではない。

外的ストレスが続くと、メンタルの弱い人間ほど『誰かが自分を見ているかもしれない。ずっとつけられているかもしれない』という強迫観念と被害妄想が強く沸き上がって来る。

これらの発生がストーカー被害者を内から蝕んで行く。

内的ストレスの恐怖はアメーバの如く増殖し、彼らを苦しめる。

沙希は密かに安堵していた。ストーカーに悩み苦しみ、傷口が広がっていく人々の行き着く先を彼女は知っていたからだ。

愛のように他に救いを求める者もいれば、心を閉ざし引きこもる人間も生まれる。久しぶりの来訪者が前者で良かった。

「警察にも相談しました。でも実被害がないからと……」

「わかります」

「もう、どうすればいいか……」

愛は半ば涙声になりながら呟いた。溝口はもう一度彼女から目を逸らした。

「どうぞ」

再び向かい合い、コーヒーを愛のカップへ。彼女はすでに三杯目のコーヒーだった。瞼が重かった訳ではない。胸が重たかったのだ。苦しみの行き場を、皮肉にも彼女は苦味の中に求めている。

目の前の男までが、私を見捨てたら。その不安がまだ彼女の中に生きている。

「一番最近ではいつですか」

溝口が聞いた。愛は小さく頷いた。

「三日前です。友人の誘いでクラブに行った時」

「クラブですか」

「はい。ブルー・クリムゾンというお店です。友達もそこには久しぶりに行くからって、誘ってくれて……でも、私ああいう所、始めてでした。それでも勝手がわからないなりに楽しんでたんです。そうしたら、バーカウンターの近くに」

「身なりは？」

「暗くてわかりにくかったんですが……佇まいでそいつだと。私は友人に説得してすぐにそこを帰って……」

愛はそこで区切るとカップに口をつけた。

「……で、実は、その日の友人の勧めでここに」

勧め。溝口も沙希も不思議に思った。誰かの勧めなら、自分達と面識のある人物が沢村愛の交遊関係の中にいるという事になる。

「勧め？ その方は僕達を知っていたんですか？」

「以前お世話になったと。あたちみか安達美香って子です」

愛が名前を告げた。沙希があっ、と声を上げた。溝口もそれに続く。

「ああ安達さん！ 奇遇ですね！ 彼女、元気になさってらっしゃるんですね」

かつて二人は似た案件でその人物と関わった事があった。ストー

カー調査というのは少ないようで多い。嘆かわしい現実だ。今、目の前にもその現実があった。

ありふれた人間関係の中で、そのような現実が立て続けに発生している。

懐かしい名前の到来の裏で、確実に魔手はその卑劣な存在感を主張していた。

「美香ちゃん、一言言ってくれば良かったのに」

沙希が口元をほころばせて言った。その雰囲気、雨音と不安に湿る室内に華を添える。愛もくすりと笑った。彼女の瞳に、この日初めて、温もりと輝きが浮かんだ。雲間から除く太陽のように。次に雲が覆うまで、その安らぎの温度を保ってあげないといけない。その必要性を沙希は知っている。守る立場になってから知った事だ。

「この話もその、急な話でしたし、美香がお二人、忙しいからって言ってたもんだから。言うのが遅れてごめんなさい」

「うっん、いいのよ！ でもすごく驚いたよ。ねえ洋介さん！」

「ああ！ すごく驚いた！」

「そんな、本当ですか？」

「うん。それに忙しいなんて、全然だよ！ ねえ洋介さん！」

「・・・・・・」

「ええ、本当ですか？」

「・・・ああ」

正直なのは良い事だ。何事にも。

「しかし、君達の交遊の中で立て続けにこんな事が起こるのはあまりにも不遇だと思う。同情ではなく、ね。笑えない話だ」

何より、救いを求める人間に正直であるべき事は絶対に譲れない。見栄も、意地も、そこには無い。

それに従うならば、やるべきことは決まっている。

信条がもたらすのは、いつも必然なのだから。

「この案件、僕に引き受けさせていただきたい」

久しぶりの仕事らしい仕事だった。

沙希に沢村愛を任せ、溝口は彼女の依頼の調書を作成した。

ストーカー調査及び彼女の簡易保護が主な職務内容だ。沙希という女性がいることで、女性の簡易保護という事務所での一時的な保護が可能となる。

そして今回に限っては、沙希の個人的な希望も強かった。費用についても、彼女の給与から引き落としてくれとの事だった。

各種手続きを終えた溝口がクラブ『ブルー・クリムゾン』に到着したのはその日の夕方だった。

店の前でタクシーを降りる。雨は一旦止んでいた。西日に輝くアスファルトが蒸し暑い熱気を漂わせている。

目的のクラブの看板やネオンはまだ点っていない。時間がまだ早い。ブルー・クリムゾンは開店前の準備中だったようで、入口には鍵がかかっていた。裏口に回る。室外機の熱風をくぐり抜け、木製の扉に手をかけた。

扉は開いた。その先はスタッフの休憩所だった。テーブルの上にコーラとコーヒーの缶が置いてある。部屋の向こう、客を吸い込む前のメインフロアに人の気配があった。

「すみません」

扉を開けたままの位置から叫んだ。すぐに足音が返事を返しにやってくる。

「はい」

やって来たのは若い女性だった。淡い色のショートカット。薄く引かれたアイラインと同じだけ薄いチーク。小振りな顔に汗が少しだけ滲んでいた。AC/DCのTシャツに、デニムカラーのスキニージーンズを履いていた。

彼女の人懐っこい声色が溝口に語りかける。

「どちら様です？」

名刺を差し出した。

「急な訪問すいません。お時間あったらお話をお聞きたいんです」

スタッフは訝しげに名刺を眺めていた。先程の溝口の言葉には、さして関心が無いように口を開いた。

「調査事務所って何ですか？」

「かみ砕いて言えば探偵です。今、ある人を探していて。その人がここに来たと聞いたので、それについて確かめたいと」

「探偵さん？ 本当ですか？」

「胡散臭いと良く言われますし、同じ分だけそう思われてるでしょう。でもこっちとしては真面目に仕事をしているつもりですよ」

溝口が笑うと、女スタッフははにかむような微笑みを浮かべた。年で言えば、沙希くらいの年頃だろう。同じ年代を生きた人間でも雰囲気はずいぶんと違った。このスタッフの方が、幼さの残る若さがあった。

「店長さんはいるかな」

「店長はまだ来てないんです。あの私、バイトだからこんなどこまで話ていいか」

「ストーカー調査の依頼で動いてます。ただ、記憶に残っている範囲でいいんです。それと思しき人間を探しているんで力を貸してほしくて」

溝口がそう告げると、スタッフは驚くような視線を彼に投げかけた。

手応えのある視線だ。ストーカーの容貌と必要そうな情報を伝えた。すると、スタッフは何か考えるように中空に目を逸らし、

「私は三日前にシフトは入れてなかったんです。でもその前後の日にちでそんな人は見た事ないかなあ」

『その日だけに』店に現れたのならばニット帽の人物が沢村愛をつけていた可能性は高い。

「待って下さい。チーフを呼びましょう。チーフなら何か知ってるかも」

そう言うのと、スタッフはフロアへ引き返して行く。溝口がその姿を目で追う。

奥に見えるフロアは、通常灯が点いているだけだった。あの輝かしいネオンもブラックライトもまだ眠っている。開店準備にあのきらびやかさは、目に毒だ。

それらを観察していると照明の繋がる天井に、溝口は見た。

その視線の下に、動くものが現れた。フロアから人が駆けてきて
いるようだ。

「チーフの牧^{まき}です」

「溝口です。少しご協力を願いたく」

「アイツから聞きました。何でも、込み入った話だとか」

ストーカー調査と聞くと、およそ掛け離れた世界を想像する人間
がいる。

彼らは得てして、その世界とそこに生きる探偵という職務に、あ
る種の興味を抱く。自分の知らない世界をフィクションとして思い
描くのに、最適な職業が探偵だ。

だがしかし、フィクションのほとんどがそうであるように、実際
は、違う。

牧もその類のフィクションを妄想する人間だった。浅黒い肌に浮
かぶ大きな瞳が好奇心に揺れていた。背が低いせいか、その輝きを
まとった姿が少年のように見える。実年齢は二十後半くらいの歳だ
ろう。

「お話、それと、アレを見せていただきたい」

溝口が言った。彼が指を指した先には、フロアの天井にぶら下が
る監視カメラがあった。

そいつもまだ、眠っていた。

「三日前……うちのクラブは他と比べてキャパが狭いから平日
でも結構人がいっぱいになるんですよ。その日も結構入ってたなあ」

店の管理室で牧が言った。監視カメラの映像を器用に動かしている。

「牧さん自身はその人物を？」

「見てないですね。なんせ人の出入りが激しいし、こんな場所ですよ？ いちいちお客さんの動きをチェックするのは難しくて……よほどの混乱でもない限りね。最近は酔い客も少ないからトラブルも無い。カメラのチェックはほとんど無いと言ってもいいです」

溝口は頷いた。確かにそうだろう。トラブルは無くとも人の目の管理は難しい。ならば、そのトラブルがない以上、カメラの監視など不要だろう。カメラ自体が、もう飾りなのだ。

「カメラはバーカウンターをカバーしてますか？」

「ええ、もちろん」

「そこを映して下さい」

牧が、画面を三日前の当該時間、バーカウンターを映すカメラ映像に切り替えた。

モデルが古いらしく、画質は悪い。おまけに、フロアの照明のまたたきが、視認をより困難にしていた。

しかし、カウンターの近くにたたずむその姿だけは、見て取れた。

「こいつだ」

「え？ どれですか？」

牧が嬉々として聞いてきた。溝口がその人物を示す。顔まではつきりと見えない。しかし、愛の語った姿や雰囲気によく似ている。

「見覚えは？」

「ん〜ん……無いです……」

予測された答えだ。溝口は牧の肩を軽く叩くと、彼の瞳を見据えた。牧が、急に強張った表情を作り出した。溝口の瞳に写る自分の表情がえらく滑稽だった。

「この映像をコピーして下さい。見極める必要があるんです」

織田龍太郎おだ りゅうたろうがその日の仕事を終えたのは午後五時過ぎだった。

市内のIT企業の内勤で働いている彼の社内での立場というのは実に窮屈なものだった。外を見れば営業達が力を奮い、中を見ればシステム・エンジニアSEが知力を発揮している。自分はいえ、冴えない会計処理だ。

当初は男の仕事としてどうかとも思っていた。いわゆる世間体という壁と圧力に、自らの自尊や尊厳を見失いかけていた。今もその傷の名残はある。

しかし勤めだして五年にもなると、そんな考えもなりを潜め、極力目立たずそれでいて素早く職務をこなそうという効率化に考えが傾きだすのだ。

もともとコネで入社した会社だし、文句は言えない。ならばそれなりに、自分の力で仕事に打ち込むべきだというのが織田の見出したアイデンティティーだった。

その志を手助けたのは彼の類まれなコンピューター技術だった。高校時代は情報処理に明け暮れ、大学も中退するまですっとパソコンの液晶と、その中に広がる演算処理と向き合っていた。

そんな彼にとって今の仕事など、赤子の手をひねるほど、という形容がぴたりあてはまるほどのルーチンなのだ。

彼を知るもののほとんどが、そこはお前の居場所じゃない、と口を揃えるのがそれを証明している。

駅に近いオフィスビルの一階にテナントを置くコーヒーショップに立ち寄った。

客は時間帯のせいか、主婦や学生達の姿が多い。少なくとも、自分のような会社勤めの人間はいなかった。

ソイ・ラテのツールサイズを注文して窓際の席に座った。
夕方からの時間というのは実にゆったりと流れるものだ。
焙煎された豆の香りが鼻孔をくすぐり、ブラインドの隙間から差し込む西日は、細かく線を描くようにして店内に色をつけて行く。
やがてのんびりしたカウベルが鳴る。

「いらっしやいませ」

店員が言った。

その声に、織田は入口の方に顔を向けた。
細切れの夕日の向こう側、光で相手の顔はよく見えなかった。

「オリジナルドリップ。ホットをツールで」

と、その声を聞いた時、織田は待ち人の到来を悟った。
逆光で確認は難しいが、向こうはすでに織田を認識しているようだ。
首が彼に向いていた。

アイツの事だ。にこりと、あの爽やかな微笑みをたたえていたに
違いない。残念だが、俺は見えてなかったぞ。

織田は口元を歪めながら思った。苦笑しながらラテに口を運ぶ。
引き上げた視線の先に、そのアイツがにこりと微笑をたたえて立ち
すくんでいた。

カップに口を付けたまま、織田は口角をにやりと吊り上げる。
織田の正面に座った男はホワイトを注ぎながら言った。

「よう」

「今日は、酒場じゃなくていいのか」

おとついの夜を言っていた。織田の顔は、半分ニヤけているようだった。溝口も苦笑した。

「仕事がないって、なげくのは止めにしたんだ。それに」

言って、溝口は窓の外へ顎をしゃくった。夕暮れがそこにはある。

「ムードの問題だ」

「なるほどね」

「そんなことより、時間を取らせてすまなかったな」

「アフターファイブが暇な俺への皮肉か？　だとしたら痛烈だぞ」

「この前は僕の話ばかり聞かせてしまったからな。だから皮肉なんて言わんよ。するなら感謝と、リユウ、お前はまだあそこにいるのか。お前の場所は別にあると思うんだがな、といった同情だ」

「馬鹿野郎。なら、いい職場を紹介してくれよ。洋介なら出来るだろ」

カップをテーブルに置いた溝口は、織田のその言葉に苦笑を飛ばした。

織田がいたずらっぽく自分を見ているのを認めて、溝口は言った。

「僕の事務所は職業の紹介はしていない。ハローワークじゃないんだ。だから職場の紹介は出来ないな。その方面のツテがない。でも、こうしてお前に職を紹介してやることは出来る。僕からの仕事をな」

「それがお前の感謝か」

「そうとも言つ」

そう言つと彼は、傍らの鞆の中から、DVDを一枚取り出した。何も言わずに織田が眼鏡を引き上げる。空になったカップを横に寄せ、鞆の中からノートパソコンを取り出し、ソフトを挿入した。

「ここで見てもはばかられない内容だろうな」

「裏であつてほしかったとか？」

「お前の仕事はポルノ以上に興奮するんだ」

「刺激的だろ？ お前のために選んでやってるんだ。こいつに、少しばかりクリーニングをかけてくれ。修正を外すなんてわけも無いだろ」

「それはありがたいね。まかせな」

学生時代からの付き合いだった。溝口は目の前の男の人柄、性格、そしてその実力をよく知っている。目立たぬ地味な仕事に就いている彼が、それに満足していない、という事も知っていた。

世間や人間の裏側に肉薄している溝口の提供する仕事、そんな織田にとってどれだけ刺激的なものか、想像に難くない。

「で、報酬は？」

作業をしながら織田が言った。かたかたと、キーボードを打つ音

が小刻みに耳に入ってくる。マウスの操作も合間にあった。まさしくネズミのように素早い動きを見せる。織田の作業の速さを表しているようだった。素早いながらも。画面の中では確かな作業が行われているに違いない。彼は、それに見合うだけの報酬を求めている。溝口も、充分それについては理解していた。

「テーマパークの年間パスがある」

「刺激的」

唇を尖らせて織田が肩をすくめた。溝口の理解と自分の認識を推し量る事にはもう慣れている。

「結局、僕は三回しか行けなかった。お前が僕のぶんのもとを取ってくれないか。それでお互いが満足するだろ」

パソコンの画面から織田は顔を引き上げ、上目遣いで溝口を見据えた。

「よく考えたら、あと三ヶ月だぞ」

「大人になると貴重な時間はみんなアフターファイブだ。そしてリユウにはその時間が多くある」

にっと、溝口は笑った。

「畜生。まあ、もらっとく。この作業は楽しみな」

客層が、ものの三十分で変わった。学生や主婦の姿が、ちらほらとサラリーマンや外国人の姿に変わり、店内の照明やBGMも一段

引き下げた落ち着いたものとなった。

織田の作業も終わりにさしかかっている。

「ここはクラブか。確か、クリムゾンだ」

映像が鮮明になってきたところで織田が言う。その言葉に溝口は驚いたように目を見開いた。

「ほんとにお前変わったよ。クラブに通うようになったのか。何か悲しいのか。言ってみ」

深々と息を吐きながら言った。しかし、そこには明確なわざとらしさがあって、それをおかしく思った織田はにやりと表情を崩す。そして、

「違う、違う。こういうところは俺にはさっぱり縁の無いところだよ。俺は昔となんも変わらんさ。安心しろ、洋介」

織田は画面を注視しながら否定した。更に続けた。

「半年ほど前、夏野^{なつ}さんが来た。まあいつもの事さ。その時、俺に預けた映像がこのだった。モデルは同じだが、設置場所は違う別カメラからの映像だったが、画面の端にこのカウンターが映ってたのを覚えてる」

「なるほどな。ここは酔う客が多かったらしい。店員が言ってたよ。夏野さんもさしずめ傷害あたりの捜査だったんだな」

「そう。夏野さんもその件で俺に協力を申し出た。だがこの映像を見る限り、あの店はカメラを取り替えてないらしいな。こいつはか

なり古いモデルだ」

「そんなもんさ。嵐がすぎても、次への対策を怠る人間なんて山ほどいるよ。一瞬の緊張の山では理解に及べないんだ」

「事が起きてからじゃ遅いというのを学習しきれなかったんだな。だから今回もこうして俺の手が折られてる」

織田が笑った。溝口も皮肉っぽく口をゆがめ、ぬるくなったコーヒーを流し込んだ。

「よし。完了だ。これくらいきれいになればいいだろう。モロ見えだぞ」

「でかした」

溝口がDVDを受け取った。それを鞆にしまい込む。

「ありがとう。好きに使わせてもらっよう」

店を出た二人の背に、昼間の雨で冷まされた少しだけ寒い風が当たる。日は沈みかけていた。

「今回も手間をかけさせたな。すまない」

「いいさ。普段の仕事より面白いんだ。お前とも話せるしな。どうだ、そろそろ?」

「ん? そろそろとは何が」

「貧乏事務所が華やかになる時じゃないのか？」

「読めないな。それに華やかさなら、足りてる」

「はん。その華やかさじゃない。探偵つてのは、今や足で調査が全てじゃないだろう。お前は特に、もっとデジタルになるべきだ」

「そういう事か。お前の居場所はそこじゃないと言った手前申し訳ないけど、所長判断じゃなんとも出来んよ。デジタルより計算高い女性が、いるもんで」

織田は軽く皮肉な微笑をたたえ、それを溝口の言葉への返事とした。

やがて目の前に駅舎が見えて来た。人波は、ほとんどがスーツ姿だった。

「じゃな」

織田が右手を掲げて、改札を抜ける。それを見送った溝口は、急ぎ足で事務所へと向かった。

『溝口調査事務所技術班』の導入はまだ早い。しばらくは今日のようにバイトとして働いてもらおう。

友の立場として、人事の立場として、君の能力は認めるが、人件費という現実はなかなか厳しいのだよ。

夜になって、雨は再び降り始めていた。

プレジデントのボディを叩く音が、車内に響き渡る。降水量はさほど多くないと見え、ワイパーの動きが雨の墜落と比例していた。寒気がした。雨、それに、山奥の採掘地だ。気温は低い。

「なあ。寒かねえか」

「つけましようか」

「ああ。誰も来んだろ」

闇の中に浮かぶその陰影。濡れた黒の車体は艶やかに発色し、さながらゴキブリのような佇まいだっただろう。

その黒い物体は一度短く呻き、赤色の目玉を点した。

「わざわざすみません」

「早よう済ませようや。今日の話し合いを」

助手席に座っていた男が促した。

暖房が効いてきた。運転席に座る男の手汗が、更に分泌を増した。助手席の方で、かちりと音がした。続いて小さな灯りが灯るのを、男はフロントガラスの反射で確認する。やがて、マルボロウの匂いと煙が瞳と鼻孔を刺激した。

「すみません。せめて窓、開けて下さい」

顔を正面に向けたまま言った。視線はフロントガラス越しに会っていた。助手席の男は、一瞬煙草を咥えた口元を少し広げると、眉間に縦しわを刻みながら窓を少しだけ開けた。二人の目は会ったままだった。

車内が雨音に支配された。煙の流れが外へ逃げる。助手席の男は、その軌跡を目で追いながら言った。

「俺達にしてみりゃうまい話じゃない。うまいどころか壊滅的なま
ずさになる。早く済ますに越したことはないぞ」

「こちらとしても慎重になるに越した事もないんです。しかし、お
互い様でしょう」

「焦る必要は無し、か」

微笑した。そして助手席の男はそつと続けた。

「料理の仕方がすべてか。今までの付き合いでお前がこつちの用意
した席に相応しい事はわかった。だから確実にいこう。俺も無駄な
犠牲は出したくない」

「その通りです。しかしお言葉ですが、戦争は避けられない」

「それを見越しての事だろ。無駄な戦争はこしらえるべきじゃない。
だが仮に起こった時、終わらせるには一気だ」

「ええ。準備は、心の準備は出来ていますから」

そこで会話は終わった。二人とも、違う方向を眺めていた。
運転席の男がちらと相手を見やる。

口元に刻まれた深いしわが、一度縮小する。やがて口一杯に含まれた煙が、外へ流れ出た。

助手席はそれを最後に、窓のわずかな隙間から煙草を弾き飛ばした。

小さな朱の輝きが雨夜の中を、ゆつたりと弧を描きながら落ちてゆく。そしてその灯りは、音も無く闇に溶け込んだ。

「なら、見せてみる」

助手席が再度口を開いた。

「今日の会合が単なる決意表明だけだと言われるのも俺は困るんだ。俺だってタマはってんだからなあ」

彼は続けた。舌で舐めるような、粘り気のある語尾が、車内に小さく反響した。

運転席の男は、その言葉に口で返す事は無く、静かにジャケットの前を開き、右脇を大きく見せ付けた。

黒色の銃把が見えた。トカレフだった。

男はジャケットを閉じた。

「そいつは」

「親父さんに言って下さい。そちらが仕入れた銃を使う、と」

助手席から狡猾な笑い声が上がった。その男は運転席の男の横顔をじっと見つめ、口角を皮肉にも似た様子で歪めた。

「ははは。冗談がきつい。首ハネられて終いだ」

続けて言う。

「俺が一番好きなのはな、欲に駆られた男の顔なんだ。もっとも、お前が欲しいものは一つだけじゃないんだろう」

次は運転席で短い微笑があがった。

「良かった。わかってくれる人だと思ってましたけど。まさか、そこまで嗅ぎ付けてくれるとは、ねえ」

そう言い、男は前に向けていた視線を助手席へ向け、そちらの男の瞳を覗き込んだ。ぎょろりとその大きさと、『色』を変えた爬虫類のような両目の瞳孔が不気味に瞬く。

「そうなんですよ。ここだけの話なのですが。俺はね」

その言葉の中に含まれるニュアンス、漂い出した雰囲気、助手席の男は、初めてその相手に薄ら寒い感覚を覚えた。

狂気に首筋を舐められる感触を味わったのだ。にわかに感じた恐怖を隠すため、言葉は出さず相手の出を待つ。毛穴から脂汗が滴りそうなのを、なんとか耐え抜いた。

そんな事は露知らぬ運転席の男は、最後にこう告げた。

「全部欲しいんです。全部、ね」

さも愉しそうな様子だった。

見覚えはあった。

そこに映り込んでいる人物の姿に、愛は一瞬怯み、そして息を調べて言った。

「この人です」

「男のように見える。これに似た風体の人物は知ってるかな？」

「いいえ……」

溝口の問い掛けに、愛は頭を振った。

「映像はこれだけだったんですか？」

受付カウンターに座っていた沙希が言う。

出来立てのコーヒーを飲んでいた。三人が同じものを飲んでいるせいで、室内には芳醇な香りが充満していた。

「ブルー・クリムゾンの全ての映像を拾った。画質はかなり悪かったが、このカメラ以外にこの人物がはつきりと映ってるものはなかったよ。この映像も、リュウに手掛けてもらったものだ」

「そうですか……」

「沢村さん。一つ聞きたい。安達さんは、この人を知っていると思いますか？」

「え？ 美香が、ですか？」

愛は不思議気に、テーブルに置かれていたノートパソコンに映る映像を眺めた。ズームアップされた怪人の姿をしばらく凝視していた。

その様子に沙希が乗り出した。

「私たちは今、愛ちゃんの依頼で、愛ちゃんの不安ごとについて調査してるでしょ？ その不安というのが、ストーカーの事よね」

「はい」

「そのストーカーというのはね、厄介な連中で本来の対象のほか、その人の人間関係にまで手を伸ばす事があるのよ。そこから、間接的に本来の対象の存在感や、ある種の匂いを感じようとするの」

愛は合点がいったように頷いた。そして同時に、嫌悪と寒気に震えた。

「前、美香をつけていた男が、諦めきれず、私に手をのばした・・・」

「ストーカー加害者の起こすべき可能性の問題として覚えていてほしいの。でも、美香ちゃんを襲った奴は確か」

「裁判を受けている。暴行の罪を問われてた。だからその男が沢村さんを、という可能性はゼロだ。ただ、君たちは仲がいい。沢村さんと一緒にいた時、あるいは君たちの交友のどこかで、この人物に線が繋がっており、その線で安達さんがこの人物を知っている可能性はあるかもしれないんだ」

愛は逡巡していた。ありとあらゆる、美香と自分の二人に共通する人間関係、自分の知っている美香の人間関係。その繋がり……。やはり、自分には限界がある事に気がついて、愛は遠い目をした。

「直接確かめよう。沢村さん、安達さんに連絡を入れられないかな？」

「はい」

愛はすぐに携帯電話を手にし、ボタンをプッシュした。

彼女は、自分の友人と目の前にいる二人に繋がりがあってくれたことを心から頼もしいと思っていた。

飛ばした電波が順調に、そして素早く目的地にたどり着いた時、その思いはますます強くなっていた。

*

安達美香がその着信を受けたのは、午後九時半を回った頃だった。自宅で夕食を済まし、シャワーも早々に浴びて、仕事帰りに買った雑誌に手を伸ばそうとしていた時だ。

携帯電話のディスプレイに、沢村愛の文字が浮かんでいるのを見て、彼女はすぐに悟った。昨日の晩、溝口のもとを訪ねると連絡をもらっていたからだ。それについての用事だろう。

順調にいったのだろうか。少し緊張しながら彼女はすぐに電話を取った。

「もしもし」

『もしもし。美香、今、いい？』

「うん、いいよ。何？」

それでも一応、聞いてみた。

『あのさ、溝口さんの所に来た。と、いうより今、いる』

良かった、と美香は思った。自分の予感が当たった事ではなく、愛が溝口のもとを訪れていたという事実に対してである。

友人の苦悶は知っていた。だから溝口を紹介したのだ。

美香が、生涯生きてきた中で探偵という人間に触れ合ったのは溝口ただ一人だけであり、彼にも一度しか世話にはなっていないが、その出会いは絶対の信頼を残して完結していた。

あれは一年前だった。

夕方。午後五時半の夕日に目を細めた。

この日は緊張でろくに仕事ができず、勤め先の携帯ショップを定時になったと同時に抜け出した。

すぐに店を出、いつもと同じようにして歩きだした。彼女は街を歩く皆のほとんどがそうしているように、音楽プレイヤーを取り出してそれを装着した。

いつも通りでなければならない。緊張を押し隠し、いつもの歩調、いつもの道筋、いつもの格好で歩く。雰囲気すら、いつものようにそれはつまり、自然であるべきという事。そして気が付いた。普通を演ずることの難しさを。

たどたどしくも歩みを進めていた彼女は、ひとつの言葉を思い返

していた。

溝口は言った。

「今日、押さえる」

自分をつけていた男が昨晚、居酒屋で揉め事を起こし、逃走した。その男をその時もマークしていた溝口は、あえてその現場を流した。

大事を起こした後に街に現れるという可能性は低いと思った。しかし、かけてみる価値はある。

男は一週間のタイムテーブルの上を、一日飛ばしで行動していた。職はなく、派遣仕事で食いつないでいる。東海の出、年は三十半ば。美香の顔は携帯シヨップでの契約で知ったに違いない。

溝口はそれらの情報を、依頼をされた一週間後には揃えていた。ようは、いつでも男の襟首を掴み上げる準備はあったのだ。

そこに昨日の一件だ。タイミングが良かった。

悪漢を取り押さえ、排除するに最も優れた状況というのは、確実な罪と立証の存在だ。

罪は昨日、目にした。あとは、『その男』が、まさしく安達美香を『ストーキング』しているという立証が必要だったのだ。

その事を美香に言うと、彼女はしたり顔で言った。溝口は、辟易したものだ。しかし、その言葉に口角が上がったのも確かだ。

「やってください。一番、ダメージがかいのは今なんでしょう？」

一年前の光景が目に浮かんだ。

男は溝口の読み通り、現れた。

溝口は男が懷からカメラを取り出し、シャッターを押した直後に取り押さえた。

傷害の裏でござろと現れる男の余罪をよそに、溝口は言った。

「やってやったよ。完了だ」

美香は、一年ぶりに彼に会う。

翌日。

白い雲が多い朝だった。昨夜の雨の匂いを残し、それをさらさらと運ぶ風は、冷たかった。雲の切れ間から時たま覗く太陽が、いいらしい。

溝口が事務所に出勤してくると、すでに愛と沙希は目が覚めた様子でコーヒーを飲んでいた。

「遅いですよ。溝口さん。愛ちゃん、仕事なのに」

「ごめん。満員で一本遅れたんだ」

「いいんです。私の仕事、時間には自由ありますから」

愛は市内のアパレルで働いている。シフト制のため、毎日に決まった出勤時間があるわけではない。

「今日は昼からです。なので仕事前に一度家に帰ります。甘えてるばかりじゃだめですから」

愛ははにかんで笑った。昨夜は沙希と共にそのまま事務所にいた。ずいぶん打ち解けた様子は、二人、とりわけ愛の表情から見て取れる。

「昨夜は自宅から映像を拾っていたんだ。沢村さんに尾行の様子は無い」

「映像？」

溝口は事務所のビルの周囲に監視カメラを事務所名義で設置してある。ネットワーク回線を利用し、ライブストリーミングという形で、自宅からその映像をリアルタイムに拾う事が出来るのだ。その目的はもちろん、ビルを訪れる人間の監視である。

職業柄、自らの元を訪れる人間の顔をいつでも引き出すことが出来るようにしておくことが保身にも関わってくる。

「今日から沢村さんの身边を調べさせてもらおうよ。常に君と一定の距離を保って行動する。それは、怪しい人間、車両、それらがチェック出来る距離ということだ。大丈夫かな」

「はい。頼りにしてます」

と、愛は微笑した。沙希に任せていて正解だったと溝口も思った。沙希との交流が、この事務所そのものの、果てはその主への慣れとして彼女の不安を払拭させていた。

しかし、昨晚は何を話したのだろうと溝口は思った。だが、こういうのは知らなくていい話の可能性が高い。下手に傷つくのは、御免だ。

「そして夜にはここで安達さんと落ち合う。今日のスケジュールはこんなところだよ」

安達美香と合流する夜までに、愛をつける人物を特定する事が出来れば、話は早い。

昨日の事務所前のカメラ映像を愛の来訪時から見る限りでは、それらしい人間はいなかった。そのためその人物が愛の事務所来訪を知っているとは思えない。しかし、溝口が動くとなれば、発覚するのは時間の問題だろう。彼が隠密に事を進めたとして、事務所が調査

拠点となる以上、いつかは感づかれる。

愛を常時ストーキングしていないならば安達美香のケースのように、何かしら計画的なスケジュールを組んで、行動を起こしている可能性がある。

愛の来訪は朝だった。その時間に尾行がないなら、相手は何かしらの職に就いている可能性だってある。

しかし現時点では情報はゼロに等しい。

相手を把握し、そこから相手のパターンを覚える。その一からの作業が必要だった。

愛は出勤準備のため、事務所を出た。

それを見届けた五分後に、溝口は彼女の後を追った。

指定しておいたルートを歩く彼女に追いつくのはたやすかった。

もつとも、二人の距離は互いの目視がぎりぎり可能な距離だった。

愛、溝口、さらにその間にもう一人くい込んでも不自然ではない間隔だ。

しかし、その間に何か怪しい影がうごめくことは無かった。

沢村愛のマンションは、事務所から電車を一つ乗り継いだ場所から徒歩十分ほどのところにある。

あたりは住宅に囲まれており、駅周辺繁華街に出ようと思えば遠くない距離ではあるが、静かな場所にあった。

五階建てのクリーム色建物の三階に部屋がある。

一階にあるオートロックにより、部外者はマンションの入り口に入るのが限界だ。

溝口はマンションの正面玄関を見渡せる位置に陣取り、愛の行動を待った。

その間、マンションの周りをそれとなく観察してみたがそれらしい人影はなかった。

「おはようございます」

ベビーカーを押す女性に声をかけられた。女性はやわらかい笑みをたたえ、溝口の瞳を覗いていた。

「おはようございます」

彼女の後姿を見送った。

環境、立地的な条件から、ストーカーのような人種が歩きにくそうな場所でもある。

そのような場所でもっとも敏感なのは、そこに住む住民だ。彼らは大々的に起こる異変はもちろん、何気ない日常に混ざりこむ砂粒に素早い反応を示す。無意識の下で、だ。

「すみません」

溝口は去る背中を呼び止めた。

「はい？」

ベビーカーの女性が目を丸くして振り返った。

溝口がその方に歩み寄る。

「最近、この辺りで何かありませんでした？ 引ったくりとか、何か小さな事件など」

何故そんな事を？ とでも言いたげな顔で女性は溝口を見ていた。しかし彼はただ、食い入るようにその表情を見つめるだけで、答えを待つ。

やがて、女性はどこか観念したような苦笑を浮かべて言った。

「さあ、聞きませんねえ……」

「そう……ありがとう」

礼を言い、再度見送った。

愛から携帯に着信があったのはそれからすぐだった。

「もしもし」

『出勤の準備が出来ました。オートロック、すぐ外しますね』

マンション周辺と、愛の部屋からの光景をチェックしておきたかった。

「開いたよ。すぐいく」

三階からの光景は決していい眺めではなかった。

電線や、道路わきに植えられた街路樹の高さとほぼ目線が同じで、空も、その下の道路も、視野が狭く悪い。中からも、外からも視認が難しいということだ。

「部屋の中からの確認もします?」

「君が許すなら」

そう言って溝口は笑った。

「何言ってるんです。どうぞ」

「おじゃまします」

招き通された。

女性の部屋は久しぶりだった。

香水と、化粧品の香りがわずかに香っている。その裏で、ハイターの残り香が、シャワー室から漂っている。部屋は片付き、雑然とした様子はまったく感じられない。

几帳面なその性格が、内外共に沢村愛を保障していた。

「そんなに気になるものがありますか？」

「あ、いや。悪い癖だよ」

観察する、というのは探偵という仕事にとって大切な一要素だが場合によつては妙な誤解を生みかねない。……その誤解が生まれないことの方が少ないのではないか。特に人前では。

溝口はたじろぎながらベランダへ出た。

道中、愛から説明を受けていた。両隣の隣人は共に女性。一人は中年のパートさんで、もう一人は大学生だ。ベランダへ出ても、その二人の気配はなかった。

肝心の見晴らしだが、こちらも部屋の外側同様、視界は悪い。さらにこちらには直近の住宅が影を作っているため、明かりもわずかなが暗くなっている。

「西日が射さないから、洗濯物に困っちゃいます」

「そうみたいだね。でも、ここから中を監視されるという可能性は低いよ。それに、住宅街という立地から相手の出方もかなり限定される」

「……そうなんですか。安心していいのかどうなのか……」

「イタズラ電話は？」

「いいえ、かかってきたことは」

「インターフォンにも？」

「そちらにも……」

「そうか……」

アプローチは少ない。三か月前からその種の恐怖を彼女が感じているのだとしたら、もう少し相手方のアクションがあるのが定石だ。よほどの小心者か。それとも、また何か別の理由があるのか。例えば、対象の生活リズムをある程度知っている者だと、過剰な行動は必要ない。

「沢村さん、過去交際していたという男性は確か……」

「前も言ったように、別れ方に後腐れは無かったし、そもそも、向こうの仕事が遠方になる理由で向こうから切り出してきたもので……です……」

「今、大阪にいます」

「はい」

「連絡は？」

愛は目を伏せた。すうと下がった瞳の軌跡は、後を残すようだった。白く濁るような、消え入りそうなその視線は、彼女の一変した雰囲気により、一層、色を濃くさせるようだった。

「取ってません。．．．あの、彼に、会うつもりですか？」

まだ、どこか消化しきれていない思いがあるようだった。

しかし、過去を引きずるその傷よりも優先されてそこに浮かぶのは、別の思いのように感じられて仕方がない。

少なくとも、彼女は過去の未練からやってくる期待の愚かさを知っている。

その愚かさや、その愚かさに他人の人生が交わるのをひどく恐れ、避けている。

「僕の判断でそれが必要と判断すれば」

彼女の人間関係の築き方、それが一度終焉を迎えた後の距離感。

沢村愛は、それらを器用に、繊細に扱う。

溝口は仕事の責任として、あらかじめ先を見越した言葉を発したが、それを言うのは苦痛だった。

そう思うたび、胸が痛くなる。不毛だと、嫌になる。

しかし、仕方がない。仕方がないのだ。

言い聞かせて、彼は目をそらした。

愛の職場のジーンズショップまでの道中にも怪しい動きはなかった。

相手に計画があり、その上をなぞるようにして愛をつけているのだとしたら、今日はその日ではないのだろう。

ジーンズショップは大型ショッピングセンターの二階に展開していた。客層は平日昼とあつて大学生や、主婦の姿が多い。土日となればかなりの客が訪れ、相当な忙しさになるらしいが今は穏やかな波間のような時間が店内には流れていた。

溝口は吹き抜けを挟んだジーンズショップの対面にあたるコーヒーストップで店の客層を監視していた。ダウンナーな空気が流れていた。一段落とした照明と、後ろを走るジャズやR & a m p ; Bの音色。

似つかわしくない。さながらショッピングセンターの中にある、砂漠だ。

だが落ち着いていて、心地よかった。

しかし、いつまでも長居することは出来ない。監視体制の不自然が悟られぬよう文庫を一冊持っているが、このような店舗での張り込みは二時間が限度だ。

それ以降はショッピングセンター内を一度周り、全体に目を走らせる。その後、事務所に戻って愛の終業を待つしかない。

コーヒーは五杯飲んだ。

合間詰めたクラブサンドがなければ、胃はだぶだぶと鳴っていたに違いない。

小説のページはわずか五ページほどしか進まなかった。本来の目的は活字ではないが、こうして読み進める物語ほど苦痛で、退屈なものはない。

溝口が小さな吐息を漏らした。内偵調査一日目は収穫なしのように思えたからだ。

諦めているわけではない。経験がそう囁いている。

店内のBGMにシエリル・リンの『Keep it hot』が小さく流れ始めた。軽快なカッティングギターの旋律に乗せて、シエリル・リンの渋みのある歌声が鼓膜を揺さぶる。ドミノ倒しのように気持ちのいいベースラインの『Got to be real』が次に来れば最高だった。

そんな溝口の期待を裏切り、二時間は過ぎた。愛の働きぶりも、忙殺されるようなものではなかった。

レジ、商品の陳列、たまにやってくる婦人のフィッシング。すべてが、ちょうど良い頃合いを見計って、彼女を必要として来る。バランスの取れた緩急が、愛の意識を自然と仕事の方に向けさせていたのだ。余計な不安や恐怖を感じていない彼女の表情は、ナチュラルに輝き、充実していた。

愛にメールを打っておく約束だった。休憩時間には目にするだろう。

『店内内偵終了。異常はなし。先に事務所に戻ります。そちらで動きがあればすぐに連絡を。仕事が終わったら連絡ください。到着までは、お店で動かずに』

事務所に戻ると、沙希が受付カウンターで事務処理をしていた。

「お帰りなさい。愛ちゃんは？」

「特に変わったことは無しだ。彼女も仕事のほうに集中できてるみたいだしね」

「マンションにも？」

「行った。人の目の行き届く環境だった。ストーカーするには好ましくない場所だったよ。パトロールの強化は要請するが、怪しい人間がいればあそこだとすぐにばれる」

「なるほど……」

そう言って、沙希が腰を上げた。

コーヒーを溝口に手渡す。

「ああ、コーヒーか……悪いけど、沙希ちゃん、それ飲みな。僕は間に合ってるよ」

言いながらジャケットを脱いだ。ソファにかけて、一息つく。

沙希は不満げにそのコーヒーに口をつけた。

「進展は無しで？」

「ああ。それなんだが……一通り話は聞いてみた。でも、ストーカーと思しき人間からのアプローチが少ない。遡れば三ヶ月前からの兆らしいが、あまりにも接触が少ないんだ」

「確かに、気がかりですね。愛ちゃんが気付いてないだけとか、そういう可能性は？」

「ありえない。彼女はここに来た時、相当おののいていた。自分が気付かないほど圧力の無い相手ならば、そうはならない。精神的にね。この三ヶ月、彼女は確かに恐れを感じていたはずなんだ。目に見えない圧力を」

「圧力……ですか」

「姿を見せないうちは、結果的にそれがどう彼女に作用するのかわからない。だが、彼女は優しい。繊細な人だ」

沙希は昨晚の愛とのひと時を思い返していた。
たわいのない話ばかりしていた。

調査契約を結んだ以上、お互いビジネスの関係だ。しかし、そこに仕事の話はなかった。探偵業に従事する立場として、人との何気ない会話から情報を収集することが仕事と言われれば反論のしようもないが、沙希はその意識を取り捨てて、愛と接した。

そこで得た情報を溝口に語る時、沙希の切り捨てた意識はすべて、嘘になる。最終的にそうせざるを得ないのが、この仕事だ。結局、そこに終着する。

「愛ちゃん、これまでいろいろあったみたいです。それでもここまでこられたのは、そんな経験で強くなれたからだと……」

「……」

ここで話すべき事は、溝口の調査に関係のない事だ。だから、最低限だけを伝えた。

「沢村さんと境遇が似ているのかい。そんな感じだ」

「……ほっておけないだけです」

同情、同調、共感、依存。

人間である以上、人は人に対してそんな感情を抱き、抱かれる。探偵としての境界と、一人の人間としての境界が、人に肉薄する仕事だからこそ、わからなくなる。どこまで踏み込み、どこまで関わればいいのか。沙希は今もそうして葛藤している。

人に近付きすぎると、その付き合い方、向き合い方がわからなくなる。近すぎて、盲目になるのだろう。

「彼女は確かに、沙希ちゃんに似ている。優しく、繊細だ。君が言うように、経験から強さも身につけているだろう。でも、それがどこまで持つか、僕にはわからない」

溝口が立ち上がった。カウンターデスクに身体を預けていた沙希に向かい合った。

「だから沙希ちゃん、彼女についてほしいんだ」

溝口も沙希も、人との付き合い方や向き合い方を知り尽くしているわけではなかった。

提示される課題を考え、そこから導き出される必要な行動を起こす。表面上のその行為の中から、二人は答えを導き出そうとしている。

溝口は提示した。沙希はそれに従う。

それらの繰り返しで、わかるものがあると信じて。

「お久しぶりです」

安達美香が溝口調査事務所の扉を開いた。

「美香」

仕事が終わりに、同じく事務所まで戻っていた愛が呼びかけた。

「安達さん、久しぶりだね。今、お茶を出そう」

「出すのは私だけだね」

溝口と沙希のやりとりに美香が表情を一層、崩す。

「ありがとうございます。その、なんだか変わってなくて安心しました」

その言葉に、沙希は横目で微笑み返す。

一年ぶりに会う安達美香は、髪色と髪型がわずかに変わった以外は、大きな変化は無かった。

胸くらいまで伸びている暗めの茶色の髪に見え隠れする大きな瞳。鼻は小さいが、薄い唇との均等が、どこか日本人離れた独特の印象を見るものに与える。愛にはない明快な雰囲気は、一年前より磨きがかかっているようだった。

「美香ちゃんは少し変わったかな」

沙希が背中と言った。

「あれから伸ばすか短くするかで、美香、悩んでたんですよ」

「ほう。まあ、めったにない出来事さ。気分も変えなくなる気持ちもわかるよ」

言いながら、溝口は美香を愛の座るソファアの隣の位置に案内すると、その目の前にあったテーブルの上に置かれたノートパソコンを開いた。

「安達さん、今日はわざわざごめん。ああ……とりあえず、一服だけしょうか」

沙希の注いだお茶が人数分、それぞれの手元に渡る。美香はそれを一口、喉に落として口を開いた。

「いえ、愛から一通り話は聞いてて、それならとここを紹介したのは私です。今回の事についても、聞いてますよ。心当たり、ですよ」

「そうだ。観てほしいものがあってね」

パソコンを起動する間に交わされた会話は短くも懐かしいものだった。

愛と美香の友好関係がその中心だった。彼女達の付き合いは大学の頃かららしい。

姉妹みたい。大学時代の二人の共通の友人が言った言葉を、美香は自ら語った。愛は恥ずかしそうだったが、嬉しそうでもあった。そこから恥じらいを奪ったものが、美香の様子だった。

交互に二人の顔を見比べながら、溝口は思った。水と油のようだと。

その差が二人の人間性の違いだ。

彼女たちはその違いを、可笑しくも思い、かけがえのない関係を築くのにはなくてはならなかった要素だと思っている。

二人の会話の間や、目を見合わせ、過去の思い出を共有するかのようにならず雰囲気の妙は、それらを悟らせるに充分すぎる魅力を放っていた。

「さて、そろそろ本題に移ろうか。時間も時間だし」

間は暖まった。

溝口はパソコンのメディアプレーヤーの中から、ブルー・クリムゾンの監視カメラ映像を引き出した。

「確認してもらいたいのは、この人だ。安達さんの知り合い、顔見知りでもいい、この人を知らないかな？」

バーカウンター周辺を映すそのカメラ。例の人物が最も視認しやすい角度で映しだされた瞬間の静止画を、溝口は指し示し、言った。織田のクリーニング技法で鮮明になっているとはいえ、相手の顔はうまく隠れている。その裏に潜む素顔と正体をなんとか掴もうと苦心する美香の表情は難しげだった。それと同時に溝口の期待も、薄れていった。

「ごめんなさい、見覚えは……」

「ないか……」

美香は申し訳なさそうに頭を下げた。

「ブルー・クリムゾンである日、安達さんが感じたこう、違和感のようなものはないかい？」

「違和感……」

美香は小首を傾げた。愛をちらりと見やって、再び考え始めた。彼女の視線が画面を走る。それまで静止画だった画面をひとしきり観察すると溝口に言った。

「初めから再生できますか？」

「ああ」

動画がーから再生を開始される。ちかちかとネオンにまたたくメインホール。

このカメラはバーカウンターと、そのメインホールの一角をカバーしているものだ。左右一定に首を動かすタイプで、織田の言う通り型としてはふた昔ほど前の旧型に落ちる。この設置位置からだ、最大に右に動けばバーカウンターの全景を、最大左に動けば、ホールとトイレを仕切る壁を映し出す。謎の人物は、バーカウンター側にカメラが移動したときに映った。

以降も、動画は再生され続けていた。美香の目はじっとその流れを追っていた。

ホールで踊り、酒をたしなむ若者達。男と女が向かい合い、微笑を交わし、身体を密着させる。その背後、横、同じような光景がリズムに合わせて揺れていた。人の動きがまばゆく映る。

カメラは、そんなホールの激しさを物語らせてくれる左エリアを映しきり、その首尾を変えようとしていた。その時だった。

「あっ」

と、美香が言った。

「今の所、もう一度戻って」

溝口が巻き戻しを行い、停止する。

「そこをパンしてください」

「ここかい」

「そうです」

映像は、カメラのふり幅、最左の場所で停まっていた。それが、美香の指し示したポイントだ。

「ここは・・・」

美香の隣に座っていた愛が呟く。

「さっきとはまったくの逆方向じゃない？」

と、続けながら美香を見た。

「ちよつとね・・・」

美香は困ったように頬に手を当てた。

「どついつ事だい？」

溝口が尋ねた。静止画の先、バーカウンター側の倍はある人の数があった。その人波の中から、美香は何かを感じ取った。それは一体、何なのか。

「いや、今回の事とは、これ、関係ないのかもしれませんが・・・

」

「いや、いいよ」

「私、クリムゾンには、何度か足を運んでたんです。最近は愛を誘って以来、ご無沙汰だったけど、前はよく行ってたんです」

「常連だった？」

「常連というか、まあ、それなりに。で、昔、私ここでちよつとしたトラブルを見て。昔は結構そういうの多くて、私もまたかつて感じてしたけど、その日はすごく印象に残ってて・・・」

「よほど騒ぎが大きかった」

「いや、酔ったお客さんが喧嘩沙汰を起こして・・・その、殴られていたのが、女性だったんです・・・その時の彼女の顔が、すごく頭に残ってます。・・・痛そうで、悲しそうでした」

美香はそこで言葉を区切った。そして、溝口、愛の目を交互に見比べた後、画面に向き直り、あるポイントに指を指した。

ホールから、トイレの方へ抜ける、人波の開けたその場所。

「この女性が、その人によく似ているなあ・・・って」

美香が悩ましげに言った。

大学二回生の大木慶太^{おおき けいた}にとって、この日はほとほと暇な一日だった。

電車を乗り継ぎ、大学へ到着したのが朝の十時。目覚めた時間は七時だった。眠たい目をこすっての登校だった。英語と、経済学の授業が午前午後に入っていた。しかし、登校してみても驚いた。その二つの授業だけが、臨時休講という事で掲示板にて告知されていたのだ。

「おいおい、まじかよ……」

ついこぼれた。なんのためにここまでやって来たのか。友人もこの日は誰も登校してきていない。履修した授業がこの日だけ重なっていないのだ。何の学も頭に入れられず、誰とも話をするわけでもない。図書館で時間でも潰そうか。そう考えたが、気乗りしなかった。脱力感に見舞われていたのだ。

知り合いのいない大学、用事のない大学ほど暇な場所はない。大学内の生協前のエントランスで、彼は購入したコーラを飲みながら憂いていた。

周りにいるのは、仲のよさそうなグループばかりだ。今日の飲み会、彼氏彼女のこと、サークルのこと……自分もよくそんな話をする。むしろ、そんな話しかない。だが、客観的に耳にするそんな話たちの中身の無さといったらなかった。

エントランスに備え付けられたテレビには誰も見向きもしていなかった。まるで自分のようだと思っただけ。しかし用も無く、ただ時間を潰すだけの彼にとっては、その存在はありがたかった。

流れてきたのはなんの変哲も無いニュースだった。市内を走っていた大型のトレーラーが踏み切りの中で横転したというものだ。まるで現実味が無い。自分に関わらなければ、車両事故も、学生達の飲み会の相談も同じベクトルで中身が無いように感じる。

実感が無いのだ。

自分がそこにいなければ、そこに関わらなければ、すべては他人事なのだ。

残りのコーラを飲み干して、慶太は立ち上がった。

その時、彼は気がついた。

「電車使えないじゃん……」

トレーラーの事故の起こった路線は慶太の利用する私鉄の線路で発生していた。ニュースが告げている。これから二時間ものダイヤのずれが生じるらしい。

「おいおい……」

電車で二時間ものダイヤのズレ。それによつて生じる社会的な損失額は一体どれほどのものになるだろう。おそらく、目もくらむほどの額が、算出されるはずだ。もちろん、慶太自身もその遅れによつて何かしらの迷惑をこうむるわけである。大学に用が無い以上、このまま帰るのが一番なのだが、それが出来ない。慶太にとってはそれが何よりの損失だ。身に降りかかってきた、ようやくの実感だった。

しかし、初めこそ頭を抱えた彼だったが、すぐに気持ちは切り替わった。

少し歩いて、別の路線で帰ろう。

その路線は慶太の今いる町から、市内を経由する形で伸びていた。

彼はその市内でその電車を降り、そこから市内をしばらく歩いて地下鉄で帰宅する。

事故のあった私鉄は乗り換え無し的一本道であったため、市内に出ることも無かった。

なので今日は買い物でもして帰ろう、と慶太は思ったのだ。

市内は閑散としていた。もちろん、時間的な条件や今日が平日ということもあるのだろうが、人の流れというのに慶太は違和感を覚えた。少しだけ、ぞっとした。

気のせいだろう。その考えを頭一杯に浮かべて、彼は気になっていた店を一つ一つ見て回る。

店の中にはなんだか安心した。人の流れ、雰囲気がいつもと変わらない・・・と、いうより正常だからだ。先ほどの外で感じた違和感とはまったく違う。

しかし、頭の中は先ほど感じた違和感の正体を探ること一杯一杯だった。なにせ、感じたことの無い感覚だったのだから。非日常に触れたような気がしたのだから。正常な世界に安堵した裏で、刺激を求める彼の本能は確実に大きくうずいていた。

お気に入りのアーティストの新譜をレジに持って行き、言った。

「外、なんかあったんですかね」

何気なく聞いた。それで原因がわかればいいと思うくらいの気持ちだった。

「そうなんですか？」

女性店員は逆に聞き返してきた。

「いや、なんか、騒がしいなあ、て思つて」

慶太はそれきり、何も知らないテイで商品とお釣りを受け取ると、店を出た。

やはり、気のせいだろう。そう思いながら地下鉄の入り口まで歩を進めた。

地下へ降りる階段まであと少し、というところだった。慶太はその声を聞いた。いや、叫び声と形容したほうが正しいのかもしれない。金切り声をもっと低くしたような、不安感を煽る耳触りだった。

「な、なんだよ……今のは」

地下への階段のすぐ近くには大通りに面した雑居ビルが乱立している。叫びはその裏側、おそらく、路地のようになっているであろう裏手のほうから聞こえてきた。地下から吹き上げられる咆哮のような電車の音が、その叫びとちょうど重なっていたのだ。何人がそれを聞き分けられていただろう。

しかし慶太は確信していた。あれは、電車がホームに入り込む音などではないという事を。だからこそ彼は、恐怖に身体を震わせ、意思とは真逆の行動を取ろうとする本能の闊歩に、高ぶりを感じていたのだ。

踵^{きびす}を返し、彼は大通りの裏手へと向かった。案の定そこは路地裏のようだった。室外機や、ゴミが沢山詰まったペール、ビールケースなどが、湿度の高い空間の中で陰気な雰囲気漂わせていた。しかし、そこにはそれ以外のものはなかった。

慶太は肩の力が自然と抜けるのを感じやはり全ては自分の思い過ぎだったと、今日、何回、そう思ったかを思い出して苦笑した。しかしその苦笑は、すぐに凍りついた。

路地に面したとあるビルの裏口が、突然開いた。そして、それと

同時に、大柄な男が一人、飛び出してきたのだ。

「ひゃっ！」

思わず素っ頓狂な声が出た。恐る恐る、扉を突き破って出てきた男に近寄る。全身がびくびくしている状態で地面に大の字に倒れこんでいた。

「うう……うう……」

男は口と鼻から血を流し、左瞼の上に大きな打撲痕を残している。潰れた左目からはどす黒い血が、どくどくと音を立てているようだった。唇の端で、白い泡のようなものがぶくぶく溢れ、その気泡が小さく破裂していた。声にもならぬ声が漏れる。右白目を震わせ、瞼の裏にひっくり返った黒目で、必死に慶太を見やろうとしていた。

「あつ……ああ……」

「大丈夫ですか!？」

そんなはずは無いと思いながらも無意識に出た言葉だった。わなわなと唇を震わす慶太の姿を白目に映し出し、身体がわずかに痙攣したのち、その男は息絶えた。

何事が起こったのか、慶太にはわからなかった。とんでもない事に関わってしまった。それはわかる。しかし、自分がそれに関わっているのに、なぜか実感が無かった。

目の前で人が死んだ。その人は、最期に俺を見て死んだ。わからない。この状況は、なんだ!？

急に疲労感が襲ってきた。ショックと、追いつかない思考に、吐き気を催す。額に浮かんだ脂汗を拭い、携帯電話を取り出す。警察に知らせるしかない。おぼつかない手。両手でしっかりと握りしめ、番号をプッシュした。慌ただしい通話が終わり、深呼吸をした。

「なんなんだよお・・・なんなんだよっ」

大木慶太にとって、この日はほとほと暇な一日のまま終わるはずだった。

しかしそれは叶わぬという事が、確かになってしまった。

大切な計画だった。

この計画が成功すれば、組は莫大な資金と、強大な権力を手にする事が出来る。そのせいか、組内部には異様な緊張感が漂っていた。

ぬかり無きよう。

そう幹部連中からの通達があつた。伊藤^{いとつ}もその命を受けた人間の一人だ。

自分のような下っ端が、とも思つた。事実、任された仕事というのは、計画全体を見ても、氷山の一角のように微々たる位置づけのものである。しかしそれでも、彼は嬉しかった。

大きな計画のメンバーに選ばれるという事は、組から一定の評価を与えられている事を意味している。確かに、伊藤は確実なシノギを行うとして、上から目をかけられていた節があつた。それに気づきつつも、彼は自分を大きく主張することなく仕事をこなしてきた。ストイックさではなく、確実に自分なら出来る、認められるという自信が、彼をそうさせていたのだ。

その日、彼は四畳半の自室で、眠っていた。硬い畳の上に敷かれた薄いシーツの上。横で眠っていた女が言った。

「電話、鳴ってる」

男はああ、と小さくつぶやき上半身をのっそり起こした。ミニテーブルの上に置かれている携帯電話が鳴っていた。ずるずると中腰

で移動して、それを手にした。携帯電話のフラップを開く。知らない番号だった。しかしそれが計画の協力者だという事に、彼はすぐに気がついた。

「もしもし」

言って、傍らのセーラムに火をつけた。

「ああ、ああ……」

相手の声に耳を貸す。くぐもった声色だった。協力者に協力している自分。紫煙の向こうに、見たことの無い栄光や優越が浮かんでいるようだと思っただ。伊藤は思った。煙草の灰を灰皿に落とし、極力、冷静に指示を聞く。

「わかった。では、また」

そう言い、電話を切る。短く、端的な会話だったが、その意味合いは大きい。

伊藤は灰皿の上で煙草をひねり潰し、しばらくの間、うなだれたように首を下に向けていた。

「仕事だったの」

ああ、と答え、彼は振り返る。部屋一杯に充満していた煙草の煙のせいで、女の顔がぼやけて見えた。頭をかきながら、大柄な身体で立ち上がる。一度、伸びをした後、再びシートの上で横になった。

「仕事なんですよ」

また女が言った。パサついた茶髪を耳にかけながら、伊藤の方へ顔を向ける。頬のそばかすと、少しのにきび跡が目立っている。化粧気がないため余計、目に付く。はだけたワンピースの首元から、細い鎖骨が覗いていた。その下には、肉つきの足りない乳房が陰りを帯びて揺れている。

「ああ、仕事だよ」

正午過ぎ。協力者からの呼び出しの時刻を告げた。

「行かないの」

かさついた唇から出た言葉には、咎めるような調子があった。しかしそこには、どこか甘いニュアンスも含まれている。

伊藤は女を見やった。ヤニ臭い息を吐き、女の顔に微笑む。

伊藤は興奮していた。訪れた仕事から来る期待と、性的な高ぶりが、本能の奥底で共鳴し、同調していた。目の前に横たわる女の華奢で貧相とも言える肉体が、いつも以上に彼をそそった。

「行く。行かないとだめだ」

と言って、伊藤は女の頭をなでた。女は微笑を浮かべ、瞳だけを下にする。

伊藤の反応に気付いていた。左手を彼のボクサーへと持つて行き、その中へ手を差し入れる。

「先にお前に」

伊藤は続けた。女はにたりと口元をゆがめる。同時に女は左手に

力をこめた。それを感じた伊藤は、女の唇を奪った。

熱い、激情を感じる。

時間まで、快楽に身を任せ、貪り尽くすつもりだった。

伊藤は、自分の地位に満足していなかった。しかし、今彼は、逆転の境地に立とうとしている。気分が乗らないわけが無い。

だから、もっとだ。なんでもいい。今は、もっと、感じさせてくれ。

女の鼓動が鼓膜を揺さぶるようだった。彼女の潤んだ瞳を見据えて、伊藤はささやいた。

「景気付けだ」

その角ビルは、ほとんど利用されていなかった。

枝組織が所有しているビルのため、組関係の用事や会合でたまに使われることはあれど、明かりが灯る事のほうが少ない。今も内部は廃墟のように、こもった空気と舞う埃によって支配されている。

伊藤も数回足を運んだ事があった。最後に利用したのは一年以上も前だが、道順も、建物の構図も、ちゃんと頭に残っていた。

待ち合わせに指定されていたのは、このビルの二階だった。

協力者の存在は、計画が立案された当初から必要不可欠な存在としてコマの中に含まれていたらしい。一部幹部達だけが初めからその存在を知っており、後に計画のメンバーだけにその存在が知らされた。伊藤もその一人だ。

このように協力者に関して言えば、情報はかなり制限されていたのだ。そのため伊藤は相手の名前も姿も知らない。ただ上から、協

力者からの連絡には気を配るように、とだけ伝えられていただけなのだ。

だから彼は、電話があつた時、それがそうだと予感できた。

二階へは、階段を利用した。何しろエレベーターの電源は落ちているのだ。ゆっくりとした歩調で上りきった所で、通路は左右に分かれる。右には空き部屋を連ねる廊下、左には突き当りに非常階段、その手前に一部屋だけ、二階エリア全体を取り仕切る管理部屋があつた。

目的はその管理部屋だった。伊藤がその部屋のドアノブに手をかける。その瞬間、内側に引かれる力で扉は開いた。勢いに連れられ、伊藤は室内に飛び込むように身体を持っていかれた。

「定刻通りだ」

と、扉を引いた男は言った。伊藤は不機嫌な調子で呼吸を整え、言った。

「おいおい。ずいぶんと乱暴じゃないか。人を招く態度じゃないな・・・協力者というのはお前か」

すこむような伊藤の声には、苛立たしさがにじんでいる。先に部屋にいた協力者はにたりと笑った。白髪の多い長髪と、それに隠れた両目。背は高く、肩幅も広い。やせているようにも見えたが、貫禄ある体躯だった。

「そうだ。さつそくだ。早く済ませたい。お前はどこまで知ってる」

協力者が言った。

「何を」

「事について。参画している組員など、誰がどんな役割を担っている」

機械のような調子で協力者は質問を伊藤に投げかける。その態度が、伊藤には腑に落ちない。

「協力者に何を協力すればいいかと思えば、ずいぶんと一方的だ」

そう言っ、頭を振った。ここで上手に出るのは、計画の進行に関わってくるかもしれない。せつかくのチャンスが水の泡になる。何より、自分の責任で全てがオジャンになった時、ケジメの取り方はエンコだけでは済まなくなる。

「でも、俺は何も知らないんだ。俺自体、この件に関しては、使い走りみたいなもんだからな。降りてくる情報なんてゼロだ」

正直にそう言った。協力者は微動だにしない様子で、ゆっくりと口を開く。

「そうか」

「そうか？」

伊藤が訝しげに聞き返した。協力者の意図が、その一言で一氣にわからなくなった。

「どついう事だ」

伊藤がわずかにすこむ。その言葉を、協力者は一蹴した。

「もういい」

その瞬間、協力者の右手が高く振り上げられた。伊藤はあつけに取られたように、その手が掲げられた先に目を移す。警棒のようなものがそこにはあった。

「お」

そう言う間に、それは伊藤の左脛に振り下ろされた。がしゅ、というような何かがかち割れる音を伊藤が聞いたとき、彼はすでに大きく叫んでいた。

激痛だった。意識が飛びそうだった。反撃をしようと試みるが、無駄だった。

脛の出血を抑えるように手をあてがう事しか出来ない。やがて、痛みに悶えるうち、次が来た。

警棒がみぞおちを水平にえぐった。伊藤の身体が前に曲がる。それに呼応するように、協力者の蹴りが、伊藤の肩に直撃した。

伊藤は室外へと弾き飛ばされた。廊下の壁に背骨がねりこむように直撃し、胃が跳ね上がる。その時、力も、意思も、くじけた。相手の力は尋常ではないのだ。

「なに、もん……だ。おま」

伊藤のかすれた声は、地面にぽとりと落ちるように掻き消える。言い切る前に、追撃があったためだ。

彼は首元をつかまれ、そのまま、非常階段の扉の方まで投げつけ

られた。

すさまじい音が鳴り響き、扉は破れた。何段が続く階段の上を、おもちゃのように巨漢が転がり落ちる。やがてその身体は、もう一枚の扉を破り、地上に落下した。

伊藤の視界は、ぐらりと反転していた。目が回り、思考が混濁している。痛みさえ、わからなくなりそうだった。口に広がる血の味だけが、彼には理解できた。

すぐに視線の先に人影が浮かび、それが自分に呼びかけてきた。その時、本能のどこかがちくりと反応して、彼の故障しかけた思考を正したような気がした。そして、その思考は彼に、血の味以外の理解を与えた。

良かった。まだ、大丈夫だ。

そう安堵した刹那、彼が理解したのは、自らの死だった。

おの 大野五郎からその一方を聞いたとき、仙田組組長、月島哲は驚愕せずにはいられなかった。

「伊藤、あいつ、通達を担なつてたはずだな」

「はい。奴の死体が見つかった事に関し、堀内の親父がこちらで話がしたいと」

月島はうなつた。珍しく、冷や汗が彼の額から流れていた。月島のこのような姿を見るのは、大野が若頭として仙田組で頭角を現すようになってから、初めての事だった。だが、無理も無い事態だった。

月島が大野を見やる。大野の、まだ若く、つやのある顔立ちに緊張の色が走った。

「下には制限をかけていたが……伊藤の知っている事はほとんどなかったはずだろう」

「はい。やつに渡せる情報はほとんどありませんでした」

「なら何故、堀内がうちを訪ねる」

「堀内の親父のとの、高坂つて若いのが伊藤とひいきにしていたみたいで。その二人、先代にはずいぶん世話、してもらってたらしいです」

月島は面白くなさそうな顔を作った。鼻から息を吐くと、机の上

で手を組んだ。

「伊藤殺ったやつはあがってないんだろ」

「はい」

少し考え、月島は言った。苦々しそうな顔をしていた。

「今回の件に関していや、うちが主導握ってる。盃交わした中とはいえ、それは前の代の話。堀内のとも今のうちの組に関して言えば、それほどの信用がない」

月島はオールバックにしていた頭を軽く撫で付けた。眉間に刻み込まれたしわが、鋭く上下し、深く落ち窪んだ眼窩からは皮肉めいた輝きが洩れている。大野は何も言わず、月島の後ろにある一枚窓によった。ブラインドを下ろす。そして少しだけ暗くなった室内の照明をつけた。

「堀内はそういう意味も込めて？」

「仮にもこのシノギには協力体制を引いている。それだけリスクは高い。それはお互い様だ。ここでうちとの結束固めようというのと、伊藤殺しについて誰が殺ったかまずは探そうという心づもりもあるんだろうな。それと」

大野は黙って頷いた。月島の冷や汗はすっかり引いていた。

「やはりこの件を利用して、向こうがうちとの力関係に横槍を入れる可能性もある。用心しろ。今はそういう場合ではないと冷静になるんだ。この件は絶対に成功させなくちゃならん。そのためな

ら、堀内と今以上に力を合わせるのは必然だ。向こうの出方に関する処理はそれからでも遅くは無い」

月島が言い切った。大野はそれに賛同するように首を振る。

月島が椅子から立ち上がる。革の軋む音が響いた。

*

市街で発見された男の遺体の下にすぐに警察がやって来た。傍らに頭をたれて俯く慶太をよそに、外野で騒ぐ野次馬の数も膨れ上がっている。

「ここは場所が悪いな」

菱田^{ひしだ}警部補が言った。

地下鉄の入口だけあり、現場は人の流れが集中しやすい場所だったのだ。

黄色の制限テープとブルーシートの遮蔽^{しゃへい}があるとはいえ、人の息遣いや、言葉の数々が現場を掻き乱している。

「大木君、とりあえず車に乗ろう。疲れただろう」

「いや、まだ」

「まあ、いいじゃねえか。マル害も移された。これ以上、初動に彼は必要ない。ならどうしてここに留めとく必要があんだ」

そう言つて菱田の制止を止めたのは所轄署の夏野警部だった。彼は目尻にしわを寄せながら慶太に微笑みかけた。その横で、菱田は不満そうな顔を作っていた。

「ちょっと署で話聞かせてほしいんだ。こんなところじゃ俺も落ち着かんからな」

慶太は何も言わず頷いた。目に光がない。それに夏野は気が付いていたが、そのような光景を目にする事には慣れていた。

「さあ、立とう」

言つて、夏野は慶太の肩を叩き、手を差し出した。その瞬間、カメラのフラッシュと、野次馬の熱気にも似た声の波が、現場に押し寄せた。

捜査員が、ブルーシートをくぐった時の隙間からそれらは入り込んで来たのだ。

「ったく。なかなか退かないな」

菱田が苦々しげに言つのを尻目に、夏野はその裏手から慶太を連れ出していた。

「なら、ここは頼むわ」

パトカーの扉を開けながら、夏野が菱田に呼び掛けた。

「わかりました」

渋々答える菱田に悪戯な笑みをたたえて、夏野は後部座席に乗り込んだ。隣には慶太がいる。

「ったく」

と、菱田がまたつぶやいた。点は、また稼げそうにもなかった。

車内では言葉を発しなかった。そもそも慶太にはその気力さえなかった。

隣に座った刑事が運転手の仲間に行き先を告げたのを最後に、その空間にて交わされる言葉はなく、彼にとってはそれが心地好いと思えた。

隣の刑事——夏野と言ったか。彼はそんな自分の心境を察してくれているようだ、と慶太は理解し、答えのないその確信にしばし甘えていた。

死んだ男の白目が、慶太の脳裏に焼き付いている。怖い。

心の整理がつかない。つくまで、今はじっとしていたい。しかし何かに、たまらなくすがりたい。自分の中に閉じこもりたいという守りの本能と、現実から隔離された妙な孤独感から逃れたいという相反する感情が、津波のように押し寄せてくる。

人の死が、それも、ただの死ではないその光景が、彼の心のピースを撒き散らしていた。

「今日は少し話し聞いて、早く帰らせてあげるからな。ゆっくり休んでくれや」

署に到着した時、夏野が言った。心遣いだったのだろう。しかし慶太はそれに答える事なく、黙って車内から抜け出た。

署内の一室に通された慶太に夏野が水を差し出した。よく冷えているようで、コップの表面に水滴が浮かんでいる。部屋の中は無機

質で、コップの置かれたテーブルと、慶太の背面に格子の付いた窓が一枚。入り口の近くに置かれている机には、男の署員が一人座っていた。慶太の目の前には、夏野が座っていた。

夏野は三十代後半くらいの見た目をしていて。頭髮は真ん中で分かれていて、その下にはやや下がり気味だが鋭い眼差しが輝いている。口角を引き上げた時に出来るしわが、妙に渋かった。

慶太は水を流し込んだことでわずかな安らぎを覚えた。慶太のペーイスを待ってくれる夏野の姿にも、彼の緊張を和らげてくれる作用があったようだ。

「俺、どうなるんですか」

と、久しぶりに声を出した気がして、慶太は自分でも驚いた。

「ん？ どうもならんよ」

と夏野が言う。

「今回の件に関しては、明らかに殺人だ。これは間違いなくそう処理される。君はそれを目撃した。その目撃した前後の様子を俺たちが聞くから、君はそれを話してくれればいい」

「そう……ですか」

「どうだ？ 出来そうかな？」

「……」

慶太はしばらくうつむいたままだった。

前後。そう言われても、今の彼の頭は、事件に関して言えばまだ相当な混乱を見せている。前が後ろに、後ろが前に。思考の方向感覚が狂っている。

「しばらく、時間もらえませんか？」

と言って、彼は両手を机につき、髪を掴みうなだれるように姿勢を崩す。

とんだ災難だ。授業の代わりが、殺人事件への関与となってしまうていたのだから。

沢村愛の身辺調査を開始して、一週間が経っていた。変わらず、互いの距離を空け、愛をつける。

服装や、仕草に気を使い、ストーカーの目を欺く事は基本中の基本だった。前回溝口は、スーツを着用していたが、今回彼は、黒のスリムジーンズにグレーのジャケットを着込んでいた。

愛が勤め先の店に入ったのを見届けて、あの喫茶店に入った。

インコグニートの『Talkin' Loud』が流れている。ホーン・セクションと、ワイルドな低音の交わりが、ブルーマウンテンの香りの中に反響する。溝口がそれを喉に落とし込むことで、彼の内で今度は演奏が始まる。彼らは音楽、ジャズというくくりの中で新しい歴史を開拓した。新たな創造、という事実と、時を経てそこから醸し出される経験に裏打ちされた確信は、時を選ばず、常に触れるものにパワーを与える。

型にはまるか、そこから自ら逸れて行くか。イタズラに逸れるわけではない。信念がその方向に向いていればの話だ。かつて後者を選んだ溝口は、まだそこから新しい何かを創造出来ないでいる。それは、彼がかつて思い描き、胸に焼き付けた意思と信念の深化がもたらすものだと思っていた。だがどうやら、その検討も一度見直すべきなのだろうと最近になって考えている。前提が間違っていれば、方程式に答えなど出ない。

「収穫無しか・・・」

最後の一口を飲み、溝口は呟いた。

今日も職場での動きは無かった。昨夜、自宅マンションに愛は帰

った。それを見越し、パトロール強化を交番に依頼したが、あの周囲にも変わった事は見受けられなかったらしい。ヤマは調査開始から一週間だ。連日して動きが無いのは前例に無い。珍しいケースだった。

ブルー・クリムゾンに行く事にした。

チーフの牧の話だけでは、心許ないことがあったし、店内で起きたトラブルなどに関し、その処理の責任や報告が行き着く場は店長にある。その人から話を聞くしかない。

午後、店が開くのを待つて溝口はクリムゾンの扉をくぐった。

きらびやかな発色の波に全身が色づき、思わず塞ぎたくなる様なトランスの爆音が耳の中に入り込む。DJブースの周囲にはたくさんの人だかりが出来ており、その場所だけ異様な熱気が立ち込めているようだった。

「やあ！」

音に負けじと溝口が叫んだ。バーカウンターのやや後方には、スタッフルームへの通用口がある。その前に、あの時の女性スタッフが立っていたのだ。

「あ、この前の」

と、スタッフは目を丸くした。あの日とは違い、今日は細身のジヤケットにグレーのパンツをはいている。あの日のファッションは開店前の作業着だったようだ。

「溝口です。牧さんいるかな？」

「え？ ああ、いますよ。また何か？」

「ちょっとこの間のお礼に」

「わかりました。呼んできます」

言って、彼女は通用口に消えた。
すぐに牧が来た。

「どうも、溝口さん」

相変わらず無邪気な輝きを瞳に浮かべている。

「ちょっと、話がしたいんです」

「こちらに」

ものわかりが良かった。牧は溝口を通用口に招く。扉をくぐった瞬間、ほっとした。耳の揺さぶりが一気に治まったからだ。

「この間のテープ、どうでした？」

廊下を歩きながら牧が尋ねてきた。

「ええ、その事なんですが、すごく助かりました。ありがとうございます」

「そうですか。良かった」

「その事です。店長さんに会いたい。今日、お店には？」

「あ、ええ、来てますが。何かあったんで？」

興味深そうに聞いてきたので、溝口は店長と会う事に牧の同席を考えた。彼が何も知らずとも、思い出すものもあるかもしれない。

「会わせてくれませんか？」

溝口の問いかけに、牧は首を縦に振った。

＊

「ずいぶん忙しいようですね」

「まあな。事件があつた。暇とは言えんな」

溝口の言葉に、夏野は答えた。

「ここ最近、街がざわめいていたのはそのせいですかね」

「ざわめく？」

「この数日、人の流れが妙だった。僕の気のせいかもしれませんが」

夏野は不思議そうに頬を吊り上げた。

二人のいるのは警察署から程近い喫茶店だった。客の入りが少なく、お互いの声がよく響くため二人の声音はかなり抑えられている。まるで子供のヒソヒソ話のようだと夏野は思った。

「気のせいじゃない。暴対の動きが活発になっててな。そのせいだ」

溝口が小さく頷きながらミルクティーを口に運ぶ。

「で、お前の方こそどうしてた。ずいぶん久しぶりじゃないか」

「あいかわらずですよ」

「あいかわらずね。そうか……で、何調べてる」

わかった風な口調で夏野が言った。バージニアメンソールを口に挟んで火を灯す。一度、煙を吐き出したのを見届けて溝口が口を開けた。

「人探し。この人です」

差し出した一枚はクリムゾンの監視カメラからプリントアウトした写真だった。

「面が見えんな。何したやつだ」

「仕事でストーカー調査をしています。今一番有力なのがその人物なんです」

「……ストーカーなるほどな。お前らしい。あの子は元気にしてるのか」

沙希の事だ。

「元気にしています。板についてますよ」

「そうか」

言って、夏野が写真に再度目を落とす。

「これだけじゃわからんな」

「一番特定しやすいのはその一枚だけなんです」

「ほお」

眉間にしわを寄せて夏野は紫煙を吐いた。顔に疲れが浮かんでいる。彼は夕方、大木慶太の取調べを再開し、それが終了した足で溝口と合流していた。

「照合してみてやる。特別にな」

「ありがとうございます」

「ここはクリムゾンだな」

「はい。さっき店長に会ってきました。この人物の聞き込み含め」

「結果は？」

「店のはあの通りです。客の把握はその人がよほどの有名人で無いと難しい。そういえばリュウから聞きました。以前、夏野さん、あそこの事件調べたんでしょう」

「あいつ」

にやりと笑うように悪態をつく。警察に協力する事は民間人の義務だが、なかなかお喋りな事をしてくれる。あの男にとっては、協力という名の借りのような気がしてならない。

「このカメラもリユウにクリーニングしてもらったんです。あの頃と、あそこの店のセキリユティーは何も変わってませんよ」

「あの店の事なんかどうでもいいさ。趣味じゃない」

「おおむね同意です。ついでに、これを。その写真と同じ日のものです。時刻もほぼ同じ。同じカメラの正反対の位置を撮影したものです」

ジャケットの内ポケットから差し出したのは、美香が目撃した女性の写真だった。テーブルに置かれたその写真を見たとき、夏野の表情が変わった。

「この女もそのストーカー調査に絡んでんのか」

「いえ。ただの偶然です。ちょっと気になったもので」

「何の偶然だか」

それきり彼は口をつぐんだ。バージニアを灰皿に押しつぶす。コップに入った水を飲み干した。溝口は、夏野が醸し出す無言の言葉をその雰囲気聞いた様な気がした。

関わるな。と。

しばらく続いた沈黙は、二人に時の流れの遅さを実感させていた。

しかし、そこには切り出すことを急ぐ必要性や、どちらかが痺れを切らしてしまいそうな切羽した要素はない。あくまで静かに、ゆっくりと流れていた。

紅茶は三回注がれ、紫煙は二回立ち上った。振り出した小雨を背に受けながら、二人は沈黙の間に身を委ねている。

やがて、夏野が顔を上げ、溝口に目を合わせると一言だけ言った。

「また連絡する」

「ありがとうございます。時間を取らせてすみませんでした」

「気にすんな」

そう言つて、夏野が先に立ち上がった。溝口はその後ろ姿を見送り、四杯目の紅茶をカップに注いだ。

その男は、人を愛するという事を三十五年生きてきてその時まで知らなかった。その間に、真に女を愛したのはただの一度きりだったのだ。

女を初めて抱いたのは十五の頃だ。遊びで犯した。それを皮切りに、彼はまさしく飢えた獣のように自らの欲を、女の肉体を利用し発散してきた。

抱くことなら、何度も、何時でも、出来た。それこそが、男と女の関係のように思っていたのだ。愛というのは、所詮、欲の塊だと人間の醜い、生々しい部分にしか巣くわれないものだとして理解していた。

だが彼は知ってしまった。息をするたび、考えるたび、苦しくなってしまう胸の痛みを。

それを初めて知った時、彼は自分が自分でなくなってしまう感覚に陥った。

なんて女々しいのか。なんと情けないのか。

だが、止められなかった。頭ではわかっていて。納得してくれないのは、心だった。

鳴り止んでくれ。

それきり、ずっとそう思っている。しかし、鼓動は鳴り止まない。そんな想念をかき消すように女を抱いていた。しかし彼は気付いている。

こんなものは、かりそめだ。かりそめだ！

だが、気付いているからこそ、彼は苦悩しているのだ。

額からこぼれた汗が目に染みる。男は、両手を女の首にかけた。女が嬉しそうにその両手を掴んだ。彼が両手に力を込める。女の嬉しそうに微笑む顔がみるみる赤く変色していった。

崩れない女の表情を眺めながら尚も彼は力を込め続け、被せた全身を大きく動かしていく。

振り続ける小雨が、彼らの背面のガラス窓に静かに当たり、伝つてゆく。その中の水滴の一粒が静かに弾けた時、男の両手に込められていた力は、そつと緩められた。

＊

仙田組事務所に黒のベントレーが乗り付けられた。ブレーキの音が響き、月島はブラインド越しに下を見る。昨夜の雨で濡れたアスファルトの上に、その一台が確認できた。振り向き、大野に頷く。大野は頷き返し、部屋を出た。

「お前ら、堀内の親父が到着した。出迎えだ」

事務所にいた若い衆に大野が呼びかける声が、月島の耳に届いた。彼は大きく息を吸い、静かに吐く。堀内がここに上がってくるまで、その行為を何度も繰り返した。

「伊藤が死んだ。聞いただろう」

月島の部屋に入るなり、堀内はそう言った。

「まあ、座ってくれ」

静かに月島が言う。堀内は神経質な面持ちで組長室の大きな革の

ソファに腰を据えた。

堀内は四十代後半の恰幅の良い体格をした男だ。短い頭髪を茶色く染めており、太い眉の下でぎよろぎよろと魚のような目が動いている。高い鼻筋には横一文字のヤツパ傷が走っている。獰猛そうに大きな口は見掛け倒しではない。

「警察が嗅ぎ付けるのも時間の問題だろう。どう隠すか、算段はついとるか」

「隠す？ 殺人についてか、それとも」

「月島、今お前のもったいぶりはいらん。わかっとる事を聞くなや」

「計画についての算段ならただ黙っておけばいい。伊藤は駒だった。が持っている情報は無かった。伊藤殺しについては誰が殺したかによって話が変わってくる。そこは警察の仕事だ」

堀内の目を見据えながら月島は静かに言った。堀内は舌を鳴らした。

「伊藤を殺したやつはわかるか」

「わからない」

「殺された理由が計画のせいだと思つか？」

月島は一度呼吸を整えて考えをまとめようとした。その様子をちらと眺めながら堀内が煙草を取り出し、啜えた。月島が小さな息を吐く。

「堀内、高坂を通したらどうだ。外におるんだろ」

「……」

堀内が煙草を指の間に挟む。一瞬後、高坂、と叫んだ。

「はい」

高坂が入ってきた。背が高く、華奢な身体をしている。友人だった伊藤とは正反対の印象だった。

「なんでしょう」

「うちの伊藤とは付き合いは長いのか」

月島が右手で堀内の隣に座るように誘導しながら尋ねた。高坂は頭を下げながら移動する。

「長いです。もう八年になるでしょうか」

「伊藤と最後に会ったのはいつだ」

「一ヶ月前です。サシ呑みでした」

高坂の鼻の奥からつんと何かが突き抜けた様な音がした。彼にしか聞こえないその音に続き、瞳の奥が熱を帯びる。伊藤の死を聞いたときのシヨックをまだ引きずっている。

「あいつ、お前に何か言ってたか。殺されるような理由になりそうな事を。仕事、私生活なんでもいい」

「いいえ、何も……あいつとは、ほとんど仕事の話はありませんでした」

「ではどんな話をしていた」

月島の質問に堀内は鬱陶しそうな顔をした。

「下らん話です」

高坂はうなだれるように言った。

「月島、お前サツじゃねえんだ。あまり突っ込んでやるな」

「大切な事だろう」

伊藤の殺しが計画に関係しているのなら、どこかで話が洩れている。その線がわからぬ限り、油断は出来ない。主導を握っているからこそ、月島は慎重だった。

「あの、伊藤は何故殺されたんです。他の組に殺られるようなシノギをしてたんですか」

高坂が鋭く言う。彼は、計画の存在と伊藤がそれに関わっていた事を知らない。

「うちの方ではない」

月島がはっきりと言った。

「本当だろうな」

堀内の嫌味のある言葉に、月島は動じなかった。

「もう一度聞く。お前自体は本当に伊藤が殺される原因を知らないんだな」

「知りません」

高坂の口調にはわずかな怒りが込められている様だった。

「高坂」

「はい」

「もういい。出る。いいな、月島」

堀内があごをしゃくつた。月島は静かに頷いた。

「手間、取らせた」

「失礼します」

高坂が深々と頭を下げ、退室した。それを最後まで見届け、堀内は苛立ちを隠さない表情で月島をにらむ。

「なんの真似だ。あ？ 月島よ」

「伊藤と一番接点があったのは高坂だろう。仕方がなかった。大目にみてくれないか」

「くそ」

「それと、今回の計画に関しては秘匿処置を強固にしたほうがいいかもしれない」

「お前、人ばかりじゃない。自分とこについてはだんまりか。伊藤が誰かに話洩らしたとは考えんのか」

「可能性はある。だが死人に口無しだ」

面白くなかった。堀内にしてみれば、わずかでもだが自分の組員を殺しの槍玉にあげられたのだ。それと同じ位置にいた人間を自分が同じように扱おうとしても、その人間はすでにこの世にはいない。堀内は目をそらし舌打ちをすると、再び向き直り言った。

「外部でこの話を知ってるのはあの男だけか」

「そうだ。あいつには法外な金を積んである。それ以外にもこつちは奴の弱みを握っているんだ、考えにくい。協力者という立場だが、俺らがあいつにかけている圧力は相当だ。裏切る事のほうがリスクが高いという事くらいわかってるだろう。踊らす材料が奴に揃っていただけがあいつに目をつけた理由じゃない。あいつのその、一般的な頭の良さも目を付けた理由だ」

「どうだかな」

「ああ。だから一応目は付ける」

「うちの若いのを使わす。すぐにでもな」

「頼む。慎重にな」

「わかつとる。向こうがこっちの疑いに気が付いたら、面倒だろ」

堀内が足を組んだ。携帯電話を取り出す。

「どこに？」

「八頭^{やず}。あいつとその下しか頼めるのはおらん」

堀内組の若頭、八頭はすぐに電話に出たようだった。やりとりを、月島は無言で見つめていた。

「おう。すぐにそっち帰る。それまでに呼び出しとけ」

電話を切った。堀内は深い息を吐いた。

「相変わらず行動が早い」

「ほつれ目はすぐに縫う」

「失敗は出来ん取引だからな」

「そつだ。成功せんと、意味は無い」

堀内が狡猾に微笑んだ。その表情を受けて、月島も微笑した。不測の事態だったが、計画の先にあるであろう結果の大きさに比べれば、そんな事は微々たる衝撃にすぎない。

特上の利潤を生み出す蜜を垂らす木が目の前に生えようとしてい

るのだ。それを無視する二人ではなかった。

「最近はこの常連になりつつあってね。お前にもご馳走したかったところなんだよ」

「それはありがたいね。で、おすめはなんだ」

「コーヒー。ブルーマウンテンがうまい」

愛のシフトは夜の七時までだった。

そのため、今日は張り込みに仕事終わりの織田を溝口は呼んでいた。

「なら、俺はオレンジジュースをもらうよ」

「話を聞かないな」

依然として、沢村愛の周囲に異常は無い。彼女にその報告をする度、愛は安堵する一方で、ストーカー自体が自分の思い過ぎだったのではないかと思慮するようにもなってきた。確かに妙なのだ。それは溝口も思っている。しかし、手を緩めるわけにはいかなかった。

「動きが無いらしいな」

織田がオレンジジュースに口を付けながら言った。

「ああ」

「警察には行かないのか」

「警察は動かない。実被害がないんだ。だから僕らのような人間が動く」

「夏野さんに頼めばいいのに」

「写真の照合は頼んだ。だが、こちらにもそれしか情報が無いんだ。手の施しようが無い」

「案外近くにあつたりしてな」

チャラけた口調で織田は笑った。

「目の前に証拠が落ちてりや警察も探偵もいらんよ。でも、今回は相手があまりにも尻尾を出してこない。正直、先行きが危ぶまれる」

「そうなのか？」

「ストーカーは対象が動けば自分も動く必要が出てくる。どれだけ潜んでいても、その影というのは必ず動くものなんだ。ほんの一ミリでもな。その一ミリをたどりにたどって引きずり出すのが僕の仕事だ。だが今回は、あの写真以外、影が無い。その影さえ、画面の向こうだ」

遠くで沢村愛が働いている。きれいに畳まれたシャツの陳列を行っていた。

「夏野さんの照合が取ればいいんだが」

溝口は憂う。しかし、その期待もあり出来ない事を、彼は薄々感じていた。

考えても仕方が無い事だった。コーヒーに口をつけて、彼は小さく首を振る。次の道筋を探すしかない。

「リュウ、今まで夏野さんはお前に何回、仕事を頼んだ」

「仕事なんて言うなよ。金は貰ってない。貸しを作ってたのさ」

「かわいそうに。いくら貸しを作ってたんだ」

「どうだろう。付き合いは長いよな。少くない数を頼まれてるよ
うな気もするが」

「その中で、クリムゾンに関する映像処理は？」

織田は氷で薄くなったオレンジジュースを飲み干した。ばりばりと口に流れ込んできた氷を噛み潰し、言った。

「一回だけだ」

溝口には、夏野が昨晚見せた表情が引つかかっていた。あの女の写真を見せた時のあの顔つきだ。あそこにいた女が今回のストーカー調査に絡んでいるとは思えない。ただ、同日同時刻にストーカーと思われる男と同じ店にいただけなのだ。

それらは全て偶然の一致として処理出来る。何故なら、二人を繋ぐ線は無いからだ。だが、その線が仮に存在しているとしたら。溝口には、その見えない線があるような気がした。それこそが、夏野の表情だ。関わるなという雰囲気を感じはしたが彼は溝口に何も言わなかった。何らかの、否定すらしなかったのだ。

「その時、夏野さんはお前に何の映像を処理させた」

「前も言ったように、監視カメラさ」

「そこには誰が映っていた」

「わかるわけないだろ。あれだけの人ごみだぞ」

「この女はいなかったか」

言って、写真を差し出した。髪の長い女。目つきは鋭く、頬が少しこけている。織田はその写真を手にし、女の顔を眺めていた。

「似ている奴ならいた気がする。この目つき、覚えがあるからな」

「夏野さんは何かこの調査について言ってなかったか」

「傷害だったと。若者が酔って暴れて、何人が怪我人が出た。面を割りたいから、カメラをクリーニングしてくれと言っていた」

安達美香の目撃した事件と、夏野が調査し、その協力を織田に頼んだ事件は同じものだった。溝口はしばし目を閉じ、考えた。偶然なのか。男と女。傷害事件とストーカー調査。二つの出来事に絡む人物が、同じ日に同じ場所にいた。

夏野からの連絡を待つしかない。その時彼は、何かを溝口に伝えるだろう。今は待とう。先走ってはいけない。彼は大きく息を吸った。

「その傷害事件がストーカーに関係あるとは思えんがな」

織田がジーンズショップに目を向けて言った。

「どうして」

「考えてみる。あんな人ごみで犯罪犯そうなんてやつはそういない。二つが繋がってたらなおさらだ。ばれるリスク高めるだけさ」

「……確かにな」

「久しぶりの調査だからって気力が空回りしてないか。焦るな。物事は、シンプルだ」

そう。焦っていた。凶星だった。

「今のは鋭い推理だったよ、リュウ」

溝口の瞳には、言葉以上の苦笑の色が浮かんでいた。それを認めた織田もまた、心配げな様子を瞳にたたえ、溝口に微笑みかける。店内内偵、今日も『異常は無かった』。

*

着信があった時、女は顔を洗っている所だった。

その音にどきつとした。この数日は常に緊張感を全身に漂わせていたのだ。張り詰めた糸のように彼女の身体はなっていた。

急いで顔を拭く。メイクの落とされた素顔の自分が、洗面所の鏡に張り付いていた。眉は無く、毛穴もわずかに目立つ。目も小さかった。しかし慣れているその光景に彼女は一瞥をくべ、リビングに駆け寄った。

「もしもし」

電話を取るまで、手が震えていた。そして、焦っていた。だから画面に表示される発信者の名前を見ていなかった。そのため、ものすごく低い声を出し、緊張に溢れた声音で電話を取ってしまった。

電話がそうでないと気付いた時には、もう遅かった。しかし、跳ね上がっていた心拍が落ち着くのを感じ、女は脱力したような調子で会話に答え始めた。

「うん、うん、わかってる。大丈夫だからサ……」

苛立たしく思われた。ボサボサの頭をかきながら電話を握りなおした。

「友達の家に泊まるって、連絡したけど。……もう、忙しいのはわかるけどさ、私の言った事くらい覚えててよ」

窓の外に目を向けた。午後七時の暗闇が広がっている。

「はい……はい、わかったよ。おやすみ」

電話を切った。瞬間、大きなため息を吐いた。拍子抜けした気分だった。しかし、話している間、キャッチが入ってきたらどうしようかというせわしなさも感じ、妙に疲れてもいた。

電話はなかった。意識をほかに向けるため、そして必要な情報を手に入れるため、テレビをつける。

NHKのニュースにチャンネルを合わせた。キャスターが伝えていたのは政治の出来事だった。こんなものは今、必要ない。

しばらく観ていると、先日のトレーラーの事故を起こした運送会

社の謝罪会見の様子が流れ始めた。国内の事件事故のトピックはこの辺りから始まる。

身を乗り出した。彼の話が正しければ、今日あたりに警察はあの事件についての報道規制を緩めるとの事だった。

キャスターが次の原稿に目を落とした。そして、

『先日、市内で発見された男性の他殺体についての続報です』

来た。女は喉を鳴らした。と同時に、電話も鳴った。びくりと肩を浮かせ、今度は落ち着いて画面表示を確認した。彼からだった。

「もしもし。今、ちょうど流れてる。言ったとおりだった」

画面を眺めながら伝えた。殺された男の名前が、現場の風景の力ツトと共にテロップ表示されている。

それは伊藤の名前だった。広域指定暴力団仙田組、と紹介されていた。

「そっちはどうだった？」

『異常ない。奴ら、もう少しけん制に足踏みすりゃいんだが』

「あいつは？ 動いてるの？」

『動いてくれる』

「本当に？」

『ああ。もうしばらく様子を見て、もうその後は潜ろうと思う。計

画に専念したいしな』

「私に出来る事は？」

『今の所はない。お前はあまり顔を出さない方がいい。前の時も正直、ひやひやだった。監視については俺の方でもうしばらく続けるさ』

「そう、なの……で、あいつ、大丈夫？」

『大丈夫、動きをずっと見ていた。間違いない。やつはやっぱりプロだ。監視は溝口洋介に任せられる』

「溝口には感づかれなかったの？」

『溝口の立ち回りを調べるだけだった。目立つ行動はしてないからまず発覚はしてない。俺もそのあたりの動き方はわかってるよ。経験は積んだつもりだったからな』

はは、と男が笑う。女は何と言えいいかわからずしばし閉口した後、

「そう……」

と、不安げに言った。その抑揚に男は気が付いた。心配ない、と固く誓うように諭した。そして、

『もう駅を出たよ。もうじき帰るから。何か食べたいものあるか。買って帰るよ』

「うっん。大丈夫。早く帰ってきて」

『わかった』

電話が切れる。

女は先ほどの電話が終わった時よりも更に深いため息をついた。しかし、このため息に含まれるものは先のものとはまた違うものを内包している。それは、苛立ちやわずらわしさとは逆の所に位置する、何か、愛しささえ感じる感情の一片だった。

仙田組にかかってきた電話の用件はわかっていて、月島から言われた通りの内容が相手の口から発せられる。

『警察は来たか』

「はい」

『うまくいったらうな』

本部からの電話だ。月島の用意してくれた返答を大野は返した。

「はい。証拠は何も」

『聞かせろ』

絵図を、と言う事だった。本部にとって、もちろん当事者の仙田組にとっても、今回の出来事は想定外のものだった。計画に参画している者の死というわけで、そこから派生する不安の種は急速に芽を出そうとしている。何者かの圧力や裏切りにせよ、先に警察の捜査の目をかわさなければならぬ。そのためのもっともなシナリオを月島は大野に伝えていた。

「伊藤の死は我々のシノとは関係がない、と言うものです」

『警察を舐めない方がいい』

「伊藤は今回のシノに関わっていましたが、持っている情報はあり

ませんでした。まず、大前提のその線は警察の手には落ちない。うちの組と、堀内にもがさかけられて発覚するような証拠は何もありません」

『だから、無関係とシラを切っても大丈夫だと』

「伊藤が扱ってた別のシノもそうです。そこであいつが恨みを買ったとて、うちの組と計画を繋ぐものは出ない」

『念は入れないのか』

本部は懸念するように言った。もっともだった。これも月島の予想したものであったが、大野にも容易に想像出来たものだった。

今回のシノギでは、多額の金が動き、今後の組織図を大きく変えるパワーバランスが生まれる。本部はシノギを取り仕切る仙田組、堀内組からの上納金、拡大される取引ルート^{はくしんかい}の完成を期待していた。強力な勢力を誇る白神会が国内最大組織となるための、『大いなる足掛かり』として、なんとしても成功させなければならなかった。そのため、本部が仙田組にかける期待は大きかった。

「はい。伊藤の死とうちの組の関与はないとだけ言えばよかった。事実、本当に無関係なんですから下手に言い繕う方が危険です」

『確かに。こちらで何か出来る事はないか。追撃は必ず来る。しつこいくらいにな』

「言うものの、捜査の手をそらすに越した事はありません。使える事実があるのなら使いたい」

『あるのか』

「伊藤が死んだのは枝の藤川の持つビルです。うちらも会合なんかで使ってたが、組の縮小で管理が難しくなった事と立地の悪さから、今ではどこの組もほとんど使ってませんでした」

『お前達と同じか、それ以上の捜査が藤川には入るだろうな』

「ええ。ですから、捜査をうちから藤川に重点的にそらせるよう動いてほしんです」

電話の向こうに一瞬、沈黙が落ちた。しばらくして、似つかわしくないオルゴールの旋律が流れる。向こうでなんらかの話し合いが行われているようだ。

それはそうだろう、と大野は思った。月島の提案を聞いた時、自分もしばし混乱したくらいだ
オルゴールが途切れ、先程の相手が言った。

『藤川を切る、という方向でいいんだな』

「はい」

『月島に任せておいてよかった』

月島の策略だと気が付いていたようだ。

スケープゴートに近い役回りを小さな組織である藤川に負わせる。同じ屋根の下にありながら、その中で弱肉強食の連鎖が生まれる。疑うべきは現場ビルを所有していた藤川も同様だが、藤川も事件への関与を否定した。共に無実、無関係を訴える仙田と藤川だが、本部が手にする天秤の皿が、藤川を天に掲げる事は必然だった。

「藤川はこのシノギを知りませんが、下手に切って向こうが不満に
暴れられでもしたら困ります。向こうには本部と戦争仕掛け^{けんか}の力は
ないでしょうが、今は波風を最低限に抑えたいのです」

『わかつてる。なるべく、穏便にいく』

穏便、とゆつくりと告げたその口先には冷酷な響きがあった。

「お願いします」

『堀内にも話しを通しとく』

「すみません」

言つて、大野は頭を下げた。受話器を下ろした。大きく息を吸い、
吐いた。軽いめまいを感じた。

*

沢村愛が溝口調査事務所に訪れたのは夕方の五時過ぎだった。

「お疲れ様」

愛が入ってくるなり、受付カウンターに座っていた沙希が言った。

「お疲れです」

「座つて」

言つて、沙希が立ち上がった。

「沢村さん」

溝口が沙希と入れ替わるようにミニキッチンの方からやってきた。この事務所は全体が十五畳ほどで、沙希の座る受付カウンターや溝口の所長机、来客用ソファなどのあるメインスペースが八畳、簡易シャワーやミニキッチン、手洗いなどのあるプライベートスペースが残りをおめていた。二つのスペースの間はアコーディオンカーテンで仕切れるようになっていて、常に開放されている。そのため、事務所全体はかなり広く見える。

愛の視線の先には、コーヒーを作る沙希の姿が見て取れた。

「調査の一時報告がしたくて」

「はい」

調査を始めてから思っていたことがある。それは、彼女の周囲になんら、異常がないという事実だ。それを伝えれば、愛が愕然とし、同時に釈然としない様子を見せるだろう事はわかっている。間違っても、異常がなくて良かったと胸を撫で下ろしはしない。なぜなら、溝口自身も釈然としないからだ。沢村愛の抱いた恐怖や不安と、自らの調査した異常なしという経過に現時点で確信が持てない。

「……そうですか」

と、一連の溝口の話聞いた愛の表情は曇っていた。彼女の正面に座る溝口も同様の顔つきをしている。

「抑止の可能性は？」

と沙希が聞いてきた。

抑止、とは犯罪加害者が第三者の介入を知り、犯罪行為の取り止めや行為の減少化を図るという動きの事である。この場合は、ストーカーが溝口の動きを察知し、身を潜めているという可能性の事だった。

「ありえる。こちら相手裏をかける立ち回りをしてたつもりだが、どこかで察知されたというのも充分考えられる」

抑止により犯罪被害が減る、または無くなる事は短絡的には解決したように思えるが、抑止力が無くなった場合、その被害がぶりかえす可能性というのはかなり高い。もとの根を摘んだわけではないからだ。

ストーカー調査のジレンマがそこにある。いつ、女性が襲われるかわからない、という不安をこの犯罪は内包している。そのため、常にその女性と周囲へ意識を向ける事が必要なのだ。しかし、そうする事で、その動きが相手に伝わってしまう事はどうしても避けられない。察知されれば、抑止が働き、完全にその身を押さえる事が難しくなる。

安達美香の時のようなケースが一番の理想だった。加害者側のタイムテーブルを調べ上げ、あえてそのタイムテーブルに飛び込んでゆく。溝口がこれまで手がけたストーカー調査は、そのような解決方法が大半を占めていた。そして、そのような解決方法こそ、定石だった。それは同時に、ストーカーという人種がストーカー行為という動きを自らの中でパターン化している、という現実があるというわけなのだ。

「まだ調査を開始してから時間は経っていない。しかし、一週間近く動きが無いのは珍しい」

「それはつまり？」

「いや、無い話じゃない。ただ、ストーカーと思われるあの人物がどんな生活を送っているにせよ、君の前に現れないのはおかしい。不定期な沢村さんのシフトだからこそ、相手はその動きを追うためにより活発になるはずなんだ」

「……溝口さんがついてから確かに、怖さとか、変な視線とか、あまり感じなくなっただよな気がします」

誰か味方がいる、という安心から来るものとは違う感覚だと愛は付け加えた。

「唯一、愛ちゃんへの被害と言えるものだった恐怖感すら無くなっただって事？」

沙希が溝口を仰いだ。

「動きが途絶え、被害も無い。抑止が働いたか……いや」

と言って、溝口が愛を見た。

「なんですか？」

「僕に依頼に来る前も、こんな風に恐怖の感じ方にばらつきがあった？」

「前までは、結構頻繁に感じてた気がします。強迫観念に捉われ過ぎてた感じが……」

「そう……」

「日にち的には、どうでしょう……確かににはつきり見られてるな、とか感じてたのは毎日ではなく、そう……二、三日置きとかだったんじゃないでしょうか」

「なるほど……」

彼は再び考え込んだ。長い沈黙が続いていた。

沢村愛は、また夢を見た。そしてその夢でまた、目覚めた。息を荒くして起き上がり、時計を見る。薄暗がりの中に、デジタル表示の午前二時三十二分が浮かんでいた。

中学三年生の頃の記憶が、そのまま夢として脳裏に再生される。夢でよく見られる誇張や摩訶不思議な脚色はない。ありのままの記憶としてそれは蘇る。しかし、夢の特色である、頭への焼き付き方だけはそのままだった。

「痛い、痛い、痛い！」

夢の中で叫んでいた。その自分の声が、起き抜けの頭の中に反響している。

「痛い・・・」

呟いて、腹部に右手を添える。

「痛くない」

夢の中ではそこに耐え難い痛みが走っていた。その痛みが過去のものとなり、夢の内容として現れるようになった今、そこに感じる痛みはなかった。

愛の家庭は彼女が十四の頃、揺れた。

父は小さな商社に勤め、母はパートとして繊維企業の内勤で働いていた。決して裕福とは言えなかったが、一家はそれぞれが満足を

感じる最大限の生活を送っていた。

沢村愛には七つ歳の離れた兄がいた。彼は高校を卒業してすぐに地元を離れた。都内で就職をした彼は愛が十四の頃に自殺した。大きな悲しみと、多額の借金がそこに残る。

しかし愛だけが悲しみを感じなかった。それは不思議でもなんでもない。

彼は、屈折した人間だった。彼につけられた傷が、まだ自分の身体に残っているのを愛は気にしている。幼い時の傷を悔やむ事はないが、表面上にも、記憶にも焼き付いているその傷痕は今でも彼女を苦しめている。

痛い。

苦しい。

やめて。

東沙希にこの事を話したのが、愛が初めて溝口の事務所に訪れた日の晩だった。

沙希は、そつと腕をめくって見せた。大きな火傷の跡が、まがまがしくそこに顔を作っていた。

「父がね、ふるう人だったの」

苦笑しながら言っていたのを忘れない。

何故、初対面の彼女に愛がそんな踏み込んだ話をしたのかはわからない。しかし、その行動が間違いでなかったと、沙希の傷跡を見た時に思った。

再び眠れそうになくて、愛は冷蔵庫からオレンジジュースを取り出し一口飲んだ。シンクに手を着いて重心を預ける。

冷たい吐息をつくとき、彼女はキッチンの戸棚を開け一箱を取り出した。眠るためにこういうものには極力頼りたくないと思っていたが、癖になっていた。飲んで、胸の動悸や心臓の高鳴りが静まり、自然と眠りに落ちる感覚が今の彼女の眠りのプロセスになっている。

白い錠剤に目を落とし、愛は目を細めた。

夕方の溝口の話が頭に浮かぶ。仮に今回の件が自分の勘違いだとしたらどうしよう。

溝口や、愛に献身的な態度を見せてくれる沙希、友人の美香。たくさんの人を自分は翻弄していることになる。

迷っていた。しかし、その迷いに決定的な決断を出せないでもいい。

言い知れぬ恐怖は本物だと、自分の心が叫びたてているのだから。

「ああ、もう」

薬を口に運んだ。水で流し込む。

長い夜から逃れるように、彼女は再度、ベッドの上に身を委ねた。

*

溝口は息を飲んだ。この日も彼は、調査を行っていた。昨夜、事務所で愛に報告した動きが無い、という事実が目の前で揺らごうとしていた。

いつものように喫茶店でコーヒーを味わいながら愛の働くジーンズショップを監視していた。そして、いつものようにじっくりこない顔立ちで店を出た。店の前は吹き抜けのようになっていて、ショッピングモールの三階部までそれは続いている。

溝口のいるのは二階だった。何気なく手すりにつかまって、愛の

働く店とその周辺、三階、一階と目を走らせた。

人影は彼の視線が一階を横切ったときに確認できた。怪しい、というより目に付きやすい連中だった。だから、溝口の目に何気なく止まったのだ。

三人組だった。皆、スーツを着ている。真ん中の男だけがグレーの色をしたものを着ていた。三人の髪型はそれぞれナチュラルな短髪で、一人はセルフフレームの眼鏡をかけていた。足の運びせ方には自然な様子が見て取れるが、隠し切れない肩を揺す癖が歩行の節々に表れている。

スラックスに手を入れていたグレーが眼鏡に左手を仰いで指示していた。眼鏡は指示されたほうへ向かった。店内インフォメーションのプレートに向かっている。

溝口の視線は彼ら三人組に注視されていた。

眼鏡が二人のもとに戻ってきた。何事かを眼鏡が伝え、二階へ顔を向けた。溝口はそつと視線を正面にそえ、自然な態度を装う。下の三人組は溝口の姿をさりと流した。それを確認した溝口は、下目で三人組を見やった。まだ二階に目を走らせている。やがて眼鏡が気がついたように、その方へ顎をしゃくり、二人を見た。

溝口も眼鏡のしゃくった方向に、そつと視線を動かした。
愛の働くジーンズショップがその先にあつた。

グレーとその隣にいた黒スーツが頷いた。彼らは肩を並べるように歩き出す。エスカレーターを指していた。

「まさか」

溝口は彼らの動きを目で追いながら、ジーンズショップへと歩を進める。あくまで自然な動きで歩く。同時に、三人組の動向にも気を配る。目指す場所が同じならば、彼らより先に店にたどり着かねばならない。彼らが愛の感じる恐怖の正体ならば、警戒しなければならぬからだ。

三人組は、明らかに筋者だった。歩き癖と雰囲気でわかる。

「珍しいな。平日の昼間から仲間連れてショッピングか」

距離的に溝口のほうが愛の店には近かった。三人組がエスカレーターを上がりきった時には、すでに溝口は彼らの足取りがやはりその店の方だと察していたため、彼らの方には目もくべない形で入店した。

客のまばらな店内の中から、愛を探す。店内奥のフィッティングコーナーにいた。客の対応をしている。

「丈はどうですか？」

と、聞こえてきた。女性客が細身のジーンズの試着をしているようだった。フィッティングルームの前に愛がしゃがんでいる。

「失礼」

溝口がそこに声をかけた。

「はい」

愛が振り返る。驚き、立ち上がった。

「どうしたんですか？」

「話が」

愛が対応していた客に、すいません、と頭を下げ、少々お待ちを、
と言いながら、耳のイヤークリップに語りかけた。

「ヘルプお願いします」

溝口も客に頭を下げた。

「これから三人組が入店してくる。男三人。君は意識せず自然に仕事を
するんだ」

「え？」

愛は動揺するように言った。

「説明は後でするよ。出来ればそこで作業を」

言って、コーナーの片隅にあるカウンターを指差した。ミシンや
型が整頓されている。

「わ、わかりました」

「いいかい、良く聞くんだよ」

溝口の説明が終わった矢先、あの三人組が店に入ってきた。

「よし」

溝口のそれを合図に二人は互いのもとを離れた。

三人組は店に入るなり、その隊列を崩した。溝口は陳列された商品を眺めるふりをしながら男達のその行動を見ていた。物も言わず散開したその身のこなしに溝口は確信した。

彼から一番近いのはグレーだった。他の二人は開放されている店の入り口をそれぞれ左右に分かれていった。グレーはそのまま溝口のいる方向、つまり向きを変えず正面を突っ切るように歩いて来た。愛にはフィッティングコーナー内のカウンターにいるようにと指示している。そこは店内でも最奥部にあるためどのような捜索を行われても発見まで、時間がある程度稼ぐことが出来る。何より、バツクルームに近い。

三人組の動きを予測しても、まずフィッティングコーナーに早く目を向けるのはグレーだった。その場所は店の正面奥にすでに見える位置にある。眼鏡と黒は左右から店内の隅々を歩くだろうから、やはりグレーが一番にたどり着くだろう。溝口の目標は定まった。

グレーが後ろを通過した。プールの香りが鼻孔をくすぐる。ちらと視線を男にずらした。他の客とすれ違っている。歩調は変わっていない。首を一つ動かさず、そのまま正面を見据えたままだ。まるで、愛の居場所を初めから知っているかのようなだったが、彼は首を動かす必要は無かったのだ。左右は仲間がカバーしているのだから。

フィッティングルームまで、だいたい十メートルくらいだろうか。目測し、溝口はグレーについていく形で向き直り、歩き出した。香水の残り香を感じながら、今度は一つ先の陳列棚に張り付く。

グレーのその無駄の無い動きはまさしくロボットのようにだった。そして、その無駄の無さこそ、物ではなく、人を探している事をこの場においては如実に表している。

「いらっしやいませ」

と、グレーに呼びかける声。

「何かお探でしょうか」

店員がグレーを引きとめた。その様子を溝口はひっそりと見守る。カモフラージュとして手にしていたネルシャツに緊張の汗がにじんでしまいそうだった。

「いや、特に」

グレーはキザな微笑を横顔に浮かべていた。

「御用がおりでしたらお呼び下さい」

店員は言い、グレーを去った。

溝口は店員から目をそらし、グレーを見やった。フィッティングコーナーとの距離は三メートルくらいにまで縮んでいた。が、グレーは足を止めていた。そして、こちらを振り返っている。先ほどの店員を気にして振り向いた感じだ。

グレーの両目は小さく、しかし鋭かった。一瞬、見つめあった後、向こうが目をそらし、再び歩き始める。顔を覚えられただろうか。溝口は思いながら、通路を右に折れた。

途中、黒がいた。彼もまた、人を探すように店内を練り歩いてい

る。それを無視し、突き当たりに出た。そこから斜め左前方に目をやれば、フィッティングコーナーが見える。そしてそこは、愛のいるカウンターの背を見る形で望むことが出来る場所なのだ。それは同時に、愛を認めるであろう人物の表情の片鱗を捉える事も可能とされている。

ちょうど、グレーがそのコーナーに足を踏み入れた頃だった。溝口はジーンズを手に取り、そっと向こうに視線を外した。初めてグレーが首を動かしている様子が見て取れた。

きよるきよると何かを探すようにしている。愛ならば、すぐ首を右に回したところにいるはずだった。

溝口の所からでは、愛の姿までは壁が死角となり確認できない。

グレーの動きが止まった。こちらに顔を向けている。視線は、カウンターの あるであろう位置に止まっている。一体、彼はカウンターの方向の何を眺めているのか。じっと目玉を固定させている。溝口は動き出そうと思った。間違いないと感じたからだ。

「すみません」

と、グレーがカウンターの方向に語りかけた。愛はカウンターの少し奥まった所で椅子に座り作業をしているはずだった。そうしろと溝口が言っていた。相手に二声かけられるまで聞こえていないふりをしている、と。

グレーの問いかけは明らかに別の目的があるような口調だった。丁寧でありながらしかし、その裏には狡猾な意図が這いずり回っている、そんな陰気な色を帯びている。その声は、溝口にも聞こえていた。

『ハセベ様、ハセベ様、お直しが終了しました。店内フィッティン

グルームへお越し下さい』

「あの」

と、グレーのいたたたと口角を上げて続けた声と、バックから流された店内放送が被さった。

溝口が傍らに陳列されていた商品のハンチングを手にし、目深にかぶった。そして早足でグレーの横についた。その時、軽くグレーと肩が触れた。

「あ、ごめんなさい」

と溝口がグレーを仰いだ。背が高く、肩幅もある男だった。香水の匂いかなりきつい。

「ハセベです」

溝口が誰ともなしに言った。愛がすつと、立ち上がる。その奥から、もう一人が立ち上がった。

「お待ちを」

と、そのもう一人の女性店員がカウンターに着いて言った。その後ろで愛がさりげなくバックに消える。

「あ、お客様もお待ちでしたか？ 大変申し訳ございません」

グレーに向かって、その女性店員は頭を下げた。

「いや、やっぱいい」

グレーは不満げに言い、消えた。溝口はもう、そちらには目を向ける事はしなかった。ここでもう一度目が合い、あまり記憶に留められても困る。

「おい、もういい。帰るぞ」

グレーが、眼鏡と黒と、フィッティングルームを抜けたところでちょうどぶつかったようだった。小声だが、溝口には聞こえていた。

「どうした」

「もういいのか」

「ああ、もういい」

やり取りが遠のいていく。

「行きました」

やがて、女性店員が店の入り口を見やりながら言った。

「ご迷惑おかけしました」

「いえ、愛ちゃんから話はほんのり聞いてましたから」

溝口が微笑むと、店員はバックに入った。愛のもとに行くのだろ
う。

残された溝口は連中の消えた方角を一度睨んだ。きついプールオ
ムの臭気だけがあとを濁している。そして、やっと掴んだ手がかり

を、まさしくその拳の中でもてあそんでいた。

「お前らもほんのり香らせるくらいにしてくれ」

鼻を曲げながら悪態をついたとき、愛がバックから戻ってきた。

「溝口さん……」

不安げに呟いた。初めて事務所に来たときの目の色を、そこにたたえている。

「大丈夫だ」

溝口は彼女の瞳に語りかけ、小さく頷く。愛もそれに、こくりと頷き返した。

カフェは空いていた。

夏野は元来、洒落た雰囲気醸し出す場所は苦手だった。確かに彼のような、くたびれ方を知っているような男がお洒落なカフェでコーヒーを飲んでいても、恐らく場の雰囲気にはそぐわないだろう。だから彼もノスタルジック溢れる、老舗のような喫茶を好む。だがしかし、周囲にそれというものがなかったため、仕方なくモダンモダンしているカフェに落ち着くしかなかった。

そんな場所に夏野を招き入れた原因は溝口だった。呼び出されたのだ。しかしなかなか溝口が来ない。少しいらいらしていた頃だった。カフェの店員も、夏野のその陰険な空気を醸し出す様子に落ち着かないようだ。

夏野もそれを察していた。だからオーダーの際、目一杯の明るさでフルーツパフェを注文し、受け取りの時にも目一杯の朗らかさでそれを手にした。

さて、そろそろ食べようかという時に、カウベルの音色と共に溝口がやって来た。

「待たせやがって」

「遅れてすみません」

謝罪し、溝口は夏野の前に置かれたパフェに気がついた。

「似合ってます」

「だろ。で、何の用だ」

「話がしたくて」

店員が来た。溝口はアイスコーヒーを注文した。

「お前の恋人じゃないぞ」

「さすがにそれは」

「馬鹿野郎」

夏野は苦笑した。

溝口は前に会った時の夏野との会話を思い出していた。クリムゾンの女についての話だ。それについてはあえて触れることはしないようにするつもりだった。今回彼を呼び出したのは別の理由にある。

「単刀直入に言います。暴力団について聞きたいのです」

「なんだ急に」

「前に言ったストーカーの一件です。今日の昼間、依頼人のところにそれと思しき連中が現れました」

「それがやくざだったのか」

「はい。しかし、僕はあの連中がストーカーであってそうでないと睨んでいます」

「どういうことだ。結局どっちなんだ」

「依頼人が本来怯えていた存在ではないという事です。しかし同時にあの連中にも依頼人を調べる必要があった、そういう事です」

「お前の依頼人は顔を見たのか」

「面通しをさせました。初めて見た顔だと言っていました」

その時、アイスコーヒーが運ばれてきた。ストローの封を解き、グラスに差し込んだ。氷が中で鳴った。夏野は、スプーンに乗せたクリームを口に運んでいる。

「やつらは何をしに依頼人の前に来た。まさか脅しか」

「脅しなどではないようでした。第一、場所は依頼人が働く店舗だったんです」

「目立つ行動をするには相応しくないな」

「はい。向こうも同じく、首実験のようなものを行うに留めたのでしょう」

「だが何故だ。本来のストーカー野郎でなく、話によりやそいつらはやくざと来た」

「何を理由にそうしたのかわかりません。しかし、この調査の中で彼らの姿を見たのはこれが初めてでした。この数日間のうちに、彼ら側で依頼人をつける理由が生まれたと考えることが出来ます」

「理由か・・・例えばだが」

「はい」

「例えば、その本来のストーカーがやくざに金を払って代行をしてもらったか」

「しかし、やはりやり口が違いすぎます。金を払ってまで代行をさせている以上は身の振り方の指示もあったと考えるべきです」

「それに、ストーカーが他者に代行を頼むというのもおかしい話だな」

「仮にそうだとすれば、そのストーカーにはやくざに代行を頼むに然る、ストーキング以外の目的があると考えるのが自然です」

「確かにな。なら、一体なんなんだ・・・」

夏野が首を振った。

「一人のポケットに入っていたマッチです」

溝口は胸ポケットからそれを取り出した。フィッティングルームでグレーと肩をぶつけた時、相手のジャケットの中から抜き取った。あの時は、獲物があってよかったと、心底ほっとしたものだ。

「ボレロ、か」

夏野はマッチに書かれているアルファベットを読みあげた。

「クラブです。ここのケツモチが知りたいんです」

溝口が言った。ケツモチ、とはいわゆる店のバックにつく組織の事だ。組の構成員は自分の組がケツを持っている店や、シヨバである街で遊ぶ。あの三人の素性を知るため、溝口は夏野を呼び出したのだ。

「その線からあたるわけか」

「はい。今はそれしか」

「マル暴にいる友人に聞いてみてやろうか」

「お願いします」

その時、溝口は不思議に思った。夏野の様子がおかしい。いつもの彼ならば、もう少し上手に出るはずなのに。

『聞いてみてやろうか』

その言葉や、ニュアンスには、どこか保守的な印象が感じられて仕方が無かった。

以前、彼は言っていた。暴対の動きが活発になっていると。それと今回の件は何か関係があるのだろうか。

夏野が携帯電話を取り出し、キーをプッシュしていた。それを眺めながらコーヒーを喉に流す。

「ああ、俺だが。一つ聞きたい」

会話がいくらか続いていた。刑事課勤務の彼だが属しているのは、

暴力団の絡むような組織犯罪ではなく強盗や殺人等を扱う強行犯係だった。

夏野が電話をかけた友人というのは同じ刑事課でも、暴力団関係の事案を引き受ける、いわゆるマル暴に所属している。その男、伊川^{かわ}は受話器の向こうで夏野の問いに応えた。

「わかった」

伊川との通話はすんなりと終わった。

暴力団に関する事案を扱う通称、マル暴は常に管轄内の組織の動向に目を尖らせている。暴力団のありとあらゆる行動を掴んで置く事がその職務だ。つまり、監視なのだ。そのマル暴として働いている彼は、管轄内のどの組織がどの店の用心棒やケツモチとして座しているのかを、一通り頭に入れていた。

「早いですね」

そして、伊川が素早く解答をはじき出せた理由はまた別に、もう一つあった。夏野もその理由には気がついている。溝口の今の言葉も、夏野には一種の揺さぶりのように聞こえた。

「ああ、バックについてる組の名前がわかった」

「教えて下さい」

伊川が電話を終える最後に付け加えた言葉があった。

『取り扱いには気をつける』

そう。取り扱いには気をつけなければならない。

夏野は溝口を見た。彼には一度、猶予をもらっていた。溝口がそれを猶予と考えているかどうかはわからない。しかし、溝口は気がつく男だと、夏野はこれまでの彼との付き合いの中で知っていた。そして、自分が猶予を設定したのも、溝口があの写真を引き出してきたからである。だが、彼はそのリミットがいつなのかという事を考えてはいなかった。

そのリミットを定めていなかったのは、溝口が本来調査すべき事情と、彼がついでのように提示してきた事情との間に繋がりが見えなかったためである。

「溝口、これは、お前だから言う事だ」

繋がりが見えた気がした。だから夏野は鋭さを帯びた目で溝口の瞳を覗きこんだのだ。溝口も、そこに込められた意思を察したように、姿勢を正した。

「はい」

「野江組^{のえぐみ}ってところだ」

「野江組」

溝口がつぶやいた。夏野はゆっくり頷いた。

「白神会って知ってるか」

「暴力団の本家の」

「そう。その下部組織だ。昔、売春やトルエンでのしてきた経緯がある。が、先の組長が逮捕されて落ちぶれた。今じゃせいしん

でせつせと稼いでるらしい」

「落ちぶれたわりには……ボレロはそこその高級クラブのようですが」

「先代時代のおこぼれさ。仁義だなんだ言ってるが、やつらは必要あらば昔の恩というのを自分らから持ち出す。組の資金繰りがやばくなった時だよ。野江はそんなプライドを投げ打って、昔の蜜の出る木にしがみついてるんだ。まあ、やる事は昔と変わらんから、店のほうもさして苦い顔はせんのだろっ」

「なぜやつらが……」

「ただの買い物とは思えんのだろ？」

それはない。溝口の勘にやつらは確かに触った。

「溝口」

夏野が低い声で言った。

「なんでしょう」

「これはここだけの話だ。俺はお前を信じて喋る」

「プライベートな……ですか？」

「独り言だ」

言い、夏野は周囲を見回した。店内のテーブルとテーブルとの間

隔は広く取られている。そして、客自体も、溝口達を含め三組しかない。互いの会話が聞こえる事はまずなかった。それを確認した夏野は、とつとつと話し始めた。

「白神会に大きな動きがある」

夏野は言った。

「暴対の動きが活発だというのがそれですか」

「ああ。だから今、マル暴はかなりピリピリしてる。いろんな情報が錯綜しているからな」

伊川の情報の引き出しが早かったのはそのせいだった。白神会系組織の資料がすぐに引き出せるよう整理されているのだ。

「おまけにコロシがぶつかってきた。殺人事件があったのを知っているな。地下鉄筋のビルで男が殺されたあれだ」

「はい。確かそれもやくざでしたな」

「ああ。俺が初動で駆り出されて、今は伊川がヒイヒイ言ってる。で、その現場のビルと言うのが白神会藤川組の管理するビルだった。だからてんやわんやさ。さっき言った本家の大仕事の動きがあるから、警察もかなり慎重になってる。直、俺もまた呼ばれるはずだ」

夏野がパフェのバナナを口に運ぶ。ゆっくりと咀嚼しているのは、考えをまとめているせいだろう。溝口を前に、どこまで警察も慎重になっている情報を話すか。その、考えに。

「藤川組と野江は兄弟関係、という事ですか」

溝口が先をついた。夏野の話をまとめると、藤川がなんかしらの形で野江に関わっているはずなのだ。でなければ、夏野がその話を持ち出すのはおかしい。となれば、考えられる答えは限られてくる。

「察しがいいな。野江は藤川の枝だ」

「となれば殺人に使われたビルを管理していた組と、今回僕の依頼人をつけていた組の人間には繋がりがあつたという事になります」

アイスコーヒーの氷はすでに溶けていた。コップの底に残っていたコーヒーと混ざり合って、濁った薄い水溜りのようになっていた。

「白神会のその大きな動きと言うのは僕にはわかりません。しかし、警察の動きが明らかに切羽しているというのは正直、素人目に見てもわかります。あれだけ街の流れが露骨に変わっていたら」

「ふん」

夏野が鼻で笑った。苦笑にも自嘲にも取れる笑みだった。

「取調べをしてる若いのにとも言われたぜ。あの日は変に街が不気味だったてな。事件の予感じゃないかって言っていた」

「警察の動きはその殺しについての動きではなかったんですよ」

「ああ。殺しについては気付きもしなかった。組も慎重になつてるときだ。奴らも鼻っ柱をくじかれてるはずだ」

「野江は落ちぶれたといっていましたね。更に末端組織なわけだ。本

家の仕事への謀反という可能性はどうなんです」

「マル暴の調べで白神会の中でもこのシノギについての情報はかなり規制されている可能性がある事がわかった。末端の連中はそもそも計画の存在すら知らないだろう。・・・だが、殺されたのがそのシノギの主導を握ってる直系組織の若いなんだ。これが余計、事をややこしくしている」

空になったパフェのグラスを脇に寄せ、夏野は前で腕を組んだ。

「組織内での犯行か外部の人間の犯行か・・・外部のものだとすると、組の意に反してどこかで情報が洩れている可能性がある」

「事件後、マル暴の監視で白神会内で動きがあつた。大量のステイルケースの流れだ。武器の可能性が高いとの事だ。今回の件を向こう側も必死で守り抜こうとしている。邪魔者はなんとしても排除したいんだ」

溝口は目を丸くした。

「がさはかけないんですか。今ならどんな容疑でもカミ突きつける事が出来るでしょう」

夏野が煙草をポケットから取り出すのを溝口はいじらしい気持ちで眺めていた。

「それがな、お上の策略なのさ」

火を灯した。白い軌跡が中空に浮かぶ。

「一網打尽にしたいのさ。白神会にとって最も打撃を与えられるタイミングはいつだ？ 奴らはそう言った」

「合理的ですね」

「そう。合理的なのさ。とつてもな」

言つて、夏野は煙に細めた目を、窓外へ投げかけた。ゆらゆらと、その輪郭がにじんでいくのを、溝口は何も言わず注視している。

どこかで聞いた事がある言葉だった。自分もその時、その言葉に従った。それが最良だったからだ。しかし、今回はどうだ。公的機関の決定とはいえ、ぎりぎりまで粘っていたら抗争の危険性すらある。タイミングを誤れば間違いなく多くの犠牲者が出る。罪無き人々が血を流すことになるだろう。それに今回は白神会内でさえ水面下で進行している出来事のような。抗争が起きても、それを止める仲介人が不在となる可能性がある。

「警察はそのタイミングをうかがつてると」

「そうだ」

「最良だとは思えません」

「組織とはそういうもんなんだよ。上の考える事には腐るほどの思惑や策略が絡みついてんだ。その中では公然の安全性だって、材料として扱われる。決してそれが優先して守られるわけじゃない」

わかつていた。ただ、夏野の口からそう聞きたかった。

夏野はバージニアメンソールを灰皿に押し付けた。

溝口は鋭い視線を向けた。

「よほどのシノギなわけですね」

「そもそも、本家さえ情報規制を行ってるこの情報が何故、うちに届いたか。それはもちろん、マル暴の常日頃の働きのおかげでもある」

「でも、マル暴だけでは行動の把握が難しくなった。……公安ですね」

夏野は何も言わず頷いた。

夏野の口数が段々少なくなっている事に溝口は気が付いている。もうこれ以上は、彼の『独りごと』を聞く事は難しそうだった。

それに公安の絡む事例となると、夏野にこれ以上を語らせる事にも戸惑いがあった。彼が自発的に溝口に話そうとしたとしても、溝口は会話の情報量を自ら制限したに違いない。

だが、『会話の成り立った』独りごとにしては手に入った情報量は悪くない。

「わかりました」

言い、頭を下げた。

「こついつ風に繋がりと読んでいたのか」

と、夏野が唐突に聞いてきた。

「まさか」

「どちらにせよ、深く関わりすぎるな」

警察として民間人にうろつきまわれると困る。

夏野以外の刑事だったら、その言葉の意味は純粹にそう取れる。だが夏野のそれには、そのような利害の破綻を恐れての警告としての意味は含まれていなかった。溝口がその破綻を引き起こさない男だと信じているからだ。

「今回の奴らのシノギ、正直俺らにも先は読めん」

「覚悟は出来ています」

「ご迷惑はおかけしません、とは溝口は言わなかった。それだけで、足りていた。」

「圭子けいこいいか。良く聞きなさい」

月島哲は自宅の自室から電話をかけていた。室内の壁は厚く作られており、その会話は誰にも聞こえない。玄関を守るボディーガードはもちろん、室外リビングに待機させているボディーガードにもそれは聞こえない。プライベートな室内から飛ばされる指示が漏れでもすれば、それはアメーバのように分裂して噂と化するだろう。私的空間であるからこそ、信頼できる者は自分だけと、割り切っていた。

「しばらくお前にガードをつけようと思う」

向こうで、娘の溜め息が聞こえた。

『いいから。そんなの』

「聞きなさい。これは大切な事なんだ」

『あんな怖い人達連れて、学校行けっていうの。無理絶対』

「うちの若いみたいになってほしくないんだ。何故彼が殺されたのか、原因はわかってない。もしかしたら、大きな火種かもしれないんだ」

月島は少しだけ声を荒げた。会話の中身はどうあれ、従ってもらわないとシノギに集中が出来ない。

『はあ。原因はわからないって……どうせまた、お父さんの仕事のせいじゃないの。ていうか、そうに決まってるじゃない』

「……今日、授業はあるのか」

月島は早く話を収束にもって行きたかった。娘の圭子を護衛させるだけの人員をすでに外に回している。月島の危惧している事態は外部からの奇襲だった。

今回の伊藤の死は、いわば警告なのだ。この次の判断を誤れば、その先に待ち構えるのは確実に組幹部周辺への攻撃だ。月島も手馴れている、いわばやくざの常套手段だ。ごく平凡な女子大に通う、娘の圭子もその標的だろう。非力であろうが、容赦はない。むしろ、一番手軽に事を運ばせる事が出来る。

『あるよ。ていうか、今、学校いるもん。その後バイトあるし』

圭子は言って、またため息を吐いた。月島がそこに畳みかけようとした。その時、電話の後ろでチャイムの音が聞こえた。

『そついう事だから、お父さんのとこの人達、連れてこないでよ』

「いや」

言いかけて、電話は切れた。月島は小さな舌打ちをした。娘にさえ今回のシノギの事を話すわけにはいかない。言えたらどれだけこの不安も楽になるだろう。明確な理由を伝えられないからこそ、圭子も拒んでいる。月島のジレンマは彼の心に大きなしこりを作っていた。

「くそ」

ぼやいた時、部屋の扉がノックされた。

「すみません」

月島は髪をかき上げ、スーツの襟を正した。扉を開いた。ボディガードが立っていた。

「なんだ」

「頭が着てます」

「通せ」

「はい」

言つて、ボディガードは頭を下げた。彼が一階に向かうのを見届けて、月島は再び部屋に戻った。

リビングで待っていた大野が部屋の扉を叩き、月島はそれをそつと開いた。招きいれ、ソファに座らせた。

「事務所空けるのは不安だったが、ここの方が秘密も保ちやすいだろう。わざわざ、来てもらつてすまんかったな」

「いいえ。とんでもない」

大野は小さく笑つて言つた。月島の自室に通されるのは久しぶりだった。広い室内はウッド調の板張りが壁に施されている。ガラスの張られたセンターテーブルが目の前にあつて、その上にはオン・ザ・ロックのグラスが置かれていた。

「好きですね」

大野がそれを見て言う。

「少し眠りたい気分だった。無理だったが」

「考えすぎないでください。伊藤の死が計画漏れのせいだと決まっていたわけではありません」

「だが、ほかに考えられる理由があるか？」

月島の鋭い視線が大野にぶつかった。大野は目をそらした。相応しい返答が思いつかなかった。

「伊藤の女がサツに連れてかれました。ですが、何も出てこんでしよう。それに、今は藤川に捜査の目は行ってます。ですから、取引はまだ続けられる」

「あれだけのしゃぶを俺は見たことがない。要は、前例がないんだ。それを使ったビジネスも、それを隠す方法にもな」

月島の喉が揺れているのを大野は悟った。その揺れの中にあるのが不安のように感じ、大野は諭すように言った。

「なら、親父が前例を創ればいい。後にく連中の前例になればいい。親父にはそれが出来る。これを成功させてのしあがって、白神会の大いなる前例を生めばいいんです。その前例が伝説にもなるかもしれない」

月島はにやけた。

「伝説か。お前も、青臭いことを言っただな」

「本当の事を言ってるだけです」

大野は真剣な顔つきで言った。

「・・・面白いな。お前は」

「とんでもない」

「それに、だ。またしこりが生まれた」

「なんです？」

大野は不安そうに言い、身体を乗り出す。月島が頬を自嘲気味に歪めた。

「娘だ。今回の件で娘が狙われる可能性もある」

「伊藤は警告。ならば次は本番、というわけですか」

「誰にとっても狙いやすいのはあいつだ。力が無い。それにあいつは、俺のような後ろ盾をあてにはしていない。あいつを守るものがないし、守りを否定、いや拒んでやがる」

守り。それは、自分達やくざ者の盾の事だ。
月島は憂い、深い溜め息をついた。

「取ってくれ」

センターテーブルのグラスを指して言った。大野は何も言わずそれを差し出した。

一息に喉に流し込んだ。ひりひりと焼けつくような熱気が、口内にこもる。目が覚めるようだった。

「お前、下の若いの連れて、行ってくれないか」

「はい？」

「娘とこだ」

「俺が、ですか」

と、大野は少し逡巡した。どこか遠い目をしている。

「どうした」

月島が目を見開くようにして大野に寄った。センターテーブル越し、対面になって腰を下ろす。大野の顔を、しばらく眺めていた。やがて彼が言った。

「親父、娘さんに俺が言ったとこで無駄ですよ」

「どういう事だ」

「頭分の俺が出たら、余計に逆効果という事です。親父に近い人間であればあるほど、娘さん反発、強めますよ」

大野の言葉に月島は閉口した。腕を組んだ。

「下の若いのに任せても無駄は無駄でしょう。ですが、俺が行って組が空きそこを今、外部の輩につつかれでもして下さい」

大野は一気に言った。

「娘さんが何を言っても聞かないにしても、ばれない程度に監視は出来ます。親父にとってはシノギも娘さんも大きな問題でしょう。ですが、今は組の結束を固める事の方に方策があります。俺は親父と共に組を固める。娘さんは別に任せましょう」

最もな理論だった。月島に揺らいでいた冷静が大野にはある。だが、大野の表情もどこか陰りを見せているようだった。月島は圭子の親であると同時に、大野の親でもある。大野は二人の親の気持ちを理解せねばならぬ立場にいた。

言葉は同じでも意味合いの違うその言葉に、大野は重圧を感じている。子としていかに親の気持ちを吸い取るか。この世界ではそれが組織力の要であることを彼は承知している。しかし、実の子を持つため大野としては、血の繋がりとしての親の気持ちを理解することは難しかった。そのため、二つのバランスを保っている助言が出来た自信は無かった。

「お前の言う通りだ」

月島がそう言ったので、大野は密かに胸を撫で下ろす。

「いいえ。口がすぎました」

「気にするな」

月島が笑った。新しく注がれたオン・ザ・ロックが大野に差し出された。

「いただきます」

グラスは、すぐに空になった。

野江組に電話がかかってきたのはその日の早朝だった。上に立つ藤川組からだった。

電話を取ったのは、事務所で電話番号をしていた若い衆だった。

「もしもし。野江組」

眠気の残る声で、野江の男が言った。

『藤川の使いだ』

「は？」

『頭、覚ませ』

「あ、ああ……」

電話の向こうはしばらく沈黙した。考えているわけではなく、相手の頭が正常に戻るのを、あえて待っているような間だ。頃合いを感じたのか、藤川の使いを名乗る男は口を開いた。

『よく聞けよ。藤川に警察のがさが入った。だが藤川の親から藤川に仕事が入ってきている。もちろん、今それを藤川は引き受けることは出来ない。やってくれるな』

藤川組はかつてトルエンを利用したシノギでのし上がってきた過去がある。その際、雇っていた情報屋が今現在も藤川についていた。藤川の衰退に伴って情報屋の稼ぎも減っているが、過去の関係のも

たらしめている持ちつ持たれつの二者の繋がりが、お互いを切り離す事を許さないでいる。そのため使いの男は、立場としては藤川組の人間としてその下部組織である野江組と付き合っていた。

「すみません。仕事、ですか？」

『そつだ』

そう言い、使いの男は私鉄駅の名前だけを告げ、

『西ロッカー、三十一』

と言う。

「キーはどこに」

野江の男が言った。訝しげな口調だった。

『ロッカーの鍵はおたくの若いのがすぐに持って帰る。そこで詳しい話は聞いてくれ』

「何をです？」

電話の向こうが静かになった。咳払いが一つ聞こえ、

『よほど遠まわしになる理由があるって事だ。ここまで言えばわかるだろう。仲間の帰りを待て。では』

と言って電話は切れた。もう一声かけるまもなくだった。野江の男は受話器に睨みを利かせるような視線を投げかけ、受話器を戻し

た。

お仲間に聞けと言っていた。

そういえば、樋口ひぐちが用事があるといつて出かけて行った。

彼の言う用事が、プライベートでないことを男は知っている。それなりに深い関係なのだ。おそらく、仕事なのだろう。ボレロあたりで酒を飲みながら仕事を持ち帰ってくる。昨晚遅くに出かけたのもそれで納得がいく。

思いながら、男は再びソファの上で横になった。

樋口が帰ってきたのはそれから三時間後の事だった。

「飯田いいだ、ちょっと」

樋口は凜としたたずまいで、朝からずっとソファの上でぐだぐだしていた飯田を呼んだ。

樋口は昨晚出かけた後、用事の済んだその足で自宅に帰っていたらしい。着替えていた。グレーの細身のジャケットが新しい。

「なんだ」

「話がある」

「そういえば、電話が早くにあったぞ」

「いいから来い」

樋口は声を荒げ、飯田を連れだした。

小さな事務所には、気持ち程度の小さな詰め所があった。電話ボックス四台くらいのその部屋は、喫煙スペースのような役回りをし

ている。事実、樋口と飯田の耳には換気扇の作動するカタカタという音が入ってきていた。

「で、なんだ」

「これ」

と言って、樋口がキーをポケットから抜き出した。

「ああ……」

飯田は合点した。

「昨日な、藤川んところに呼ばれてな。酒を呑んだ。案の定、下請けだったよ」

「電話で聞いた。何の仕事だった？」

樋口がキーを出した胸ポケットから今度は一枚の写真を取り出す。飯田がそこに視線を落とし、言った。

「知らない女だが？」

「そいつを見つけてほしいとき。その後で、ロッカーに行けと」

樋口はそれだけ言って、煙草を取り出した。飯田もそれに続く。

「暇な奴、鈴木^{すずき}あたり、拾うか」

何ともなしに飯田が言った。樋口は煙を吐きながら、ああ、とだ

け呟いた。

*

轟いていた。

骨と肉が無理に圧迫される時の、くぐもった音が。

響いていた。

骨そのものが、音を出していた。

感じていた。

ほとばしる感情が、冷めてゆくのを。

聞いていた。

今となつては、耳をも塞いで逃れなくなるようなその叫びを。

痛んでいた。

もう遅いと叫びたてる、胸の奥が。

目が、覚めた。

*

「この騒ぎ、本当にびびらせてくれるな」

「まったくです。予想も出来なかった」

採掘現場には夕日の淡い色合いが落ちかけていた。
使われなくなった廃材には、雨風をしのぐためのブルーシートが
かけられていた。プレジデントの車内から、すでに汚れたそれらが

西日に照らされるのが見える。

助手席の窓の開く音がした。運転席に座っていた男は何も言わず、薄暗くなり行く採掘場の大きな穴に目を落としていた。

やがて、マルボロウのむせた香りが漂ってきた。

「この工事は昔、俺が手がけていてな。借金返せない酒屋の親父を貧乏建設業者に入れて働かせた。でもすぐにパアさ。親父は自殺して業者は潰れた。弱いもの同士の組み合わせさ。タイミングもだが、一番悪かったのは配合の仕方だった」

助手席は苦々しく笑いながら言った。

「昔の苦い思い出だが、その時のその教訓は生きている」

「なんです」

「弱いものと弱いものの掛け合わせは馬鹿のやる事だ」

「そのままじゃないですか」

運転席に座っていた男は、ハンドルの上を指先でもてあそびながら微笑み返す。

「そう。そのままさ。だが、試したことのない事も、その教訓の中にはある」

煙をふかした。窓の外に流れ、茜色に染まる。

「教えてください」

「逆の話だ。強いものと強いものの掛け合わせだ。どうなるんだろ
うな、一体」

くくく、と途切れるような笑いが車内に響く。どこか悪戯にも聞
こえた助手席の男のその疑問に、運転席の男は苦笑せずに入られな
かった。

「それは、誰の事を言ってるんです」

「あえて言う必要はねえだろう」

煙草を外に投げ捨てた。

日は確実に落ちてきている。窓の外から入り込む風の温度は低く
なり、からつとした湿度の無さが、肌に刺し込むようだった。

「親父から指示された仕事についてる。だが動きがない」

「見当が外れている、とかでは？」

「何とも言えんな。誰が殺ったと思う」

「さあ。今はその事に関して、組の方でも密かなけん制があったり
します。取引に参画してる一部若いのが」

「踊らされるな。せめてお前がうまくバランス取れるようにな」

「はい」

二本目の煙草を指先に挟んだ。火を灯す。浮かび上がった陰影は
すではつきりと判別出来るようになっていた。

「ただ、予期せぬ形で兵隊が準備出来そうです」

「藤川だろ。俺もその話を聞いた時、それを思いついた。やつらは韓国にパイプがあった。拳銃密入ルートにも顔が利くだろう。引き込めるだろうか」

「今は無理でしょう。しかし、ほとぼりが冷めた頃なら、充分可能かと」

「そうか……」

しばらく沈黙が続いた。

「やるか」

助手席はそう呟いて、二本目を闇に落とした。

「やるしかない、でしょうね。無駄な犠牲を抑えるためなら」

月島圭子は自分が嫌いだった。いや、自分自身を取り巻く環境が嫌いだった。

あでやかに撫で付けられた、前で整えられた黒い髪は今ではブラウんだ。チューリップの小さなリボンが乗っかっていたが、それも水玉のカチューシャに変わって、りんご病と称される赤らみは、あえてチークで色合いを頬に浮かばすほどに消えた。

幼かった当時の自分。そして、今の自分。時は流れど顔のつくりには、かつてのきっぱりとした面影が浮かんでいる。生き写しのよな姿が地下鉄車両の窓ガラスに反射していた。

あれからどれだけ時間が経過したか。思い出すにたやすいが、彼女は未だに複雑な気持ちに陥る。

思い出すのは、小学校一年生の頃の記憶だ。

アミという女の子がいた。アミちゃん、アミちゃんと口では言っていたが、圭子は心の中ではバイキン、バイキンと罵っていた。

そんなアミは圭子と同じ保育所の出身で、上がる小学校の地区も同じだった。

圭子はアミにいじめられていた。よくある子供のいたずらで、上履きや持ち物を隠されたり壊されたりするといった類の行いだった。圭子は耐えた。親に告げる事が恥ずかしいとか、その後の仕返しが怖いとか、そんな理由が原因ではなかった。ただ単に、耐えるべき事だと思っていたからだ。いじめに対する胸の痛みより、恐怖が先行していた。怖いものには耐えるべきと、母親が言っていた。それを彼女は実践していた。

小学校に上がると保育所だけでなく、同じ学区にある幼稚園の子供達も圭子の同級生として同じ教室の仲間となる。知らない顔ばかりだった。優しそうな子、友達になれそうな子、いじわるそうな子、圭子の瞳は無意識に彼らを選別する。

天使はいるか。

王子はいるか。

そしてまた、新たなバイキンはいるか。

やがて、はたとその視線が止まった。

幼稚園から上がってきたコウジ君はスポーツ万能で元気も良かった。頭も良くて、ハンサムだ。いわゆる、もてるタイプの少年だった。圭子は彼を好きになってしまった。

彼は王子だ。王子だ。

圭子の初恋は王子様だった。

「おい、サッカーやろ」

昼休みに友達に声をかけるコウジ君の表情を、圭子はいつも楽しみにしていた。そしてその間にも、いつ彼に声をかけようか、どんな風に声をかけようかと時期をうかがっていたのだ。

罪作りなコウジは、悩ましく、どきまぎと揺れる恋心を圭子以外の女の子にも植えつけていた。

「あの、コウジ、ケン」

圭子が勇気を出したのは夏休み明けの九月中ごろの事だった。放課後、掃除の終わった後に、声をかけた。

「コウジ君で、サッカー好きなの？」

圭子はサッカーを知らない。しかし、コウジと話す自然なきっかけとして、その話題が一番妥当だと、当時の彼女は考えていた。

「おう、好きだけど。圭子ちゃんも好きなん？」

圭子ちゃんと呼ばれた。

圭子ちゃん。

耳の先から、湯気の立つ感覚を幼い圭子は覚えた。

「う、うん……」

なんと答えればよいかわからない。名前を自分の目をみて呼ばれた事、自分の関心のない話題をどう繋げていくか、という焦り。圭子はじっと下を向いたきり、何も言えなくなった。しかし、コウジは屈託も無くこう言うのだ。

「そっか！ 嬉しいな！ 女子の仲間も欲しくてさあ！ また、昼休みに遊ぼうな」

圭子は純粹に嬉しかった。胸がばくばくして、呼吸が速くなるのを感じた。何より、身体の芯から突き抜ける高揚感に、彼女の膝頭は小さく震えていた。

コウジの背中を見送りながら、彼女は夕日の射す廊下にたたずんでいた。

明日には遊ぼう。帰って、サッカーについて勉強しよう。

圭子はわくわくして仕方がない。

仲間になれるんだ。あの、コウジ君と仲間に！

しかし、彼女は知らない。コウジ君はやはり、罪作りの男なのだ。否、罪を生みやすいと言ったほうが正しいのかもしれない。

翌朝。まっすぐに、人当たりの良いコウジの人格を利用した、幼き罪人が罪を生んだ。

「圭子ちゃんの机にザリガニが入ってた」

圭子の友人の一人が、職員室の担任の下を訪れて言った。その時、圭子は一人、誰もいない廊下で泣いていた。

夏休みの間に弱った、クラスで飼っていたザリガニ。その命は昨晚のうちに失われたらしく、宿主を亡くした骸の腐臭が、圭子の机の中から漂っていた。気が付いたのは、彼女自身だ。

誰の仕業検討はついている。

だから、いつものあいつだから、ほっとけばいい。でも、許せない。

だって、あいつ！今回に限っては！

「死体飼ってるなんて汚いから近寄らないで！」

アミが高らかに言ったのは、圭子が教室に戻ってすぐの事だった。彼女は入学後から、その勢いをぐんぐんと増している。

圭子にとっては、それがより強く感じられるのだ。なぜなら、彼女以上に、バイキンと罵れるほどの性格を備えた人間がいらないからである。

このクラスで一番『強い』のは、誰の目にも、アミだろう。だからこそ、発言力が彼女にはある。時としてそれは、物を言わずとしても発揮される時があるほどだ。

幼稚園組にも、アミを超える人間がいなかった。いれば何か変わっていたかもしれない。良い方には変わらないだろうが、少なくとも、コウジとのおうやつと掴んだチャンス揺るがすような今の危機は無かったはずだ。圭子は激しくアミを嫌悪した。

「コウジ君、こんなやつとサッカーするの？」

「なんで知ってんの？」

コウジが困った風に聞いていた。昨日の、サッカーと一緒にするという会話は圭子とコウジの間でしか交わされなかったし、周囲に人がいた気配も無かった。だが、やつは知っている。

バイキンは、バイキンだな。どこにでも住み着いてやがる。

圭子は下唇を噛みながらうつむくしかなかった。

コウジ君に触れるな。コウジ君に、私の話をするな。

圭子は途端に怖くなる。コウジの顔はどんな顔だろう。アミの言葉が、どれだけコウジに訴求しているか。

仲良くなれそうだったのに。せつかく……！

「やめるよ」

その声が誰のものか、下を向いている圭子にはわからなかった。そもそもその時の彼女の頭に、人の声を理解するだけの冷静さが無かったのだ。顔を恐る恐る上げた。

「俺は圭子ちゃんと遊ぶ。汚くなんかない。触ったわけでもないのに」

コウジだった。コウジがアミの目をじっと見据えて顎を引いていた。

「な、え？」

「そういう事だから、言わないであげて」

と、コウジが続ける。そして彼は、涙を流す悔し顔の圭子を振り向き、笑った。

「気にしないで。もう、泣かないで」

コウジの微笑みは今でも彼女の心の焦げ目に、『痛み』を作っている。その痛みが生まれたのは、アミのせいでもある。いや、これこそ自分自身の環境のせいだ。

「アミちゃんが転校だって」

そんな噂話がある日圭子は聞いた。冬休みを目前とした、寒い日だった。

「そうなんだ」

と、しらっと流した圭子だったが、心の中では喜びや優越が飛び跳ねていた。

ようやく、いなくなる。平和な学校生活が訪れる！でも何故突然？

「アミちゃんとおこのお父さんね、なんかお金が返せないって、だから他のところで働くって」

子供の自分には精一杯な事があった。それは、隠す事、だ。

圭子の両親は、圭子が常日頃隠していたアミへの感情を、悟っていたに違いない、大人、とりわけ両親ともなれば、子の変化など手に取るようにわかっていたのだろう。子供の精一杯など、たかが知れているのだ。そして今回のアミの暴挙のもたらした恐怖が、ついに圭子の親を怒らせたのだ。

今にして思えば、圭子には自分の親のした働きかけが安易に想像がつく。父親の、したことが。

アミは冬休み明けには学校には来なかった。それはそれで嬉しかったが、今度は別の悲劇が圭子を襲う事になる。

人が、去ってゆく。自分の周りから、いなくなる。どうしてだ、どうして？

小学生の圭子にはその理由はわからなかった。アミの退場と引き換えに、今度は自分が他人の輪から退場させられようとしていた。確実に、友人達も距離を置いている節がある。例えば、下校を共にすることがなくなった。例えば、休み時間でのおしゃべりのやり取りが、続かなくなった。向こうに、続ける意思が感じられなくなった。

私が、バイキンなの？

圭子を取り巻く変化は、徐々に徐々に、露骨なものとなってゆく。そしてついに、恐れていたことが起きた。

いつものようにコウジが昼休みのサッカーの呼びかけを友達に行っていた。順番で言えば、自分の今日の役割は、『守り』のはずだ。

「あつ、圭子ちゃん」

コウジが言った。

「何？」

コウジはしばらくしどろもどろな態度を取っていた。が、少しして決心したように言うのだ。

「お母さんがさ、圭子ちゃんとは遊ぶなって……女の子を怪我させたら困るでしよって」

小学生の圭子にもわかった、親から子への『忠告』だった。

そうか。話は、私のお父さんのした事はきつと、みんなのお父さんやお母さん達に知られていたんだ。

圭子には自分の親のしたことと善悪の判断がその時にはまだ、つかなかった。親はそれを言わないし、周りのみんなももちろん言わない。

圭子が真にその意味を理解したのは、それからずっと時が流れてからの事だった。

「お前とは、もう関わりたくない」

その意味を理解した頃の圭子の頭にはコウジのあの時の言葉が、真のあの時の言葉が反響しだしていた。

私の初恋はそういう風に終わったのだ。そういう、風に。

地下鉄が駅に着いた。ホームの階段を上り地上に出る。バイト先まではここから歩いて少しのところにある。

夜の街を足早に進む。ネオン輝く視界の先に人影が現れた。

圭子は啞然とその人物を認めた。

「やだ、もう」

小さな声が自然と口をついた。相手には聞こえないほどの、まさしく本心が露出してしまったかのような突飛さだった。圭子はそれに、しまった、と思わず口をつぐんでしまった。

「どうも。圭子ちゃん」

「父から聞いたんですか」

「たまたま近くを通りがかっただけだよ」

あざとい言葉を口にしながら、大野は笑っていた。

地元を離れたのは、親に捨てられたからだ。いきがっていた。欲しいものは力で手にし、名誉や肩書きは、コネと呼ばれる地元の悪の基盤たちからいただくチャンスを何度となくささげられてきた。

確かに自分の世界がそこにはあった。それが自分の知る現実だったし、自分の生きる現実だった。しかし、それが正常な社会生活、しいては通常の人間の社会活動ではないと彼が知ったのは彼の弟が大きく関係している。

真面目な弟だった。一方で、ただひたすらに自らの快樂と自由を謳歌した兄、大野五郎。

記憶が彼を苛む。ハンドルを駆る。対向車線をバイクが横切る。疾走していた。風を切り、肌にぶつかる冷たい風が身体の芯を冷やし、かたやその刺激は乗る者のテンションを過熱させる。

記憶が彼を苛む。ハンドルを強く握り締めた。だがこれは、呪縛ではない。なぜなら、今の自分がかつてとなんら変わらぬ道を歩んでいるのだから。

二台目のバイクが同じように横切った。

お兄ちゃん。

そう、聞いた気がした。言葉は、あの時のニュアンスだった。

「お兄ちゃん」

「何だ」

「かつこいい」

「何が」

「それ」

「バイクか」

「うん」

真面目な弟。水と油。相反するものが一つ屋根の下で暮らす。水は油に興味を示す。それが不自然な流れであると、誰が言い切ることが出来よう。その実感を大野が得たのは、彼が十五の頃だった。きっかけは些細なことだった。大野はある日、自分や家族、果ては自分の家に訪れる仲間のものとは違う銘柄を、自宅の灰皿に見た。それは、まだまだひねり消すにはもったいないほど残っており、落とされた灰の量も、比例して雀の涙ほどだった。なんとなく、それが誰の仕業かわかった。そして大野は嬉しくなった。意味も無く嬉しくなった。また仲間が増えたくらいに思っただ。

「よお、お前、ヤニ吸っただろ」

弟は節目がちに頷いた。大野の隣にいた金髪の女がケラケラその様子を見ながら笑っている。夕方の通学路。ブレザーを着た中学生と、だぼだぼのダウンとジーンズ、そして金髪にピンクのシャツとミニのパンツを履いた女のアベックが向かい合っている。道行く人々はなんて光景だと思っていたに違いない。

「昨日、晚帰って灰皿見たらよ。ラークが捨ててあった。誰も吸わねえ」

大野が女に言った。彼は昨晚遅くまでその女の家に行った。二人目の女だった。

「どうだった。うまくいったか？」

「全然」

弟は苦々しく言った。いつもとは態度が違うことに大野は気がついた。俄然としつつも、そこに覇気はない。どこかに吸い取られているようだった。なぜなのか、大野は気がついた。

弟の視線の先は明らかに大野の目にぶつからない。金髪の露出された太ももにちらちらと注がれていたからだ。

「ほうほう」

悟った大野がにやりと笑った。肘で女の腕をつき、顎で弟のほうをしゃくった。女もすぐに気がついた。

「マジで」

けらけらと汚らしい笑みが女からこぼれる。

「今日はそれでやんの」

大野が弟に言った。

「え？」

弟は我に帰ったように、頭を上げた。意表をつかれている。落ち着き無く、そわそわし始めた。大野はその様子に、ほほえましさを

感じ朗らかな笑みを、女は蔑みにも似た微笑を弟にささげた。

「オナ」

「え？ あっ、いや」

「きやはは」

女が馬鹿のように笑い出した。大野はまた肘で女をつき、ほら、
と言ってポケットから取り出したものをその左手に握らせる。女は
それに見向きもせず、しかしそれが何かすぐに理解したうえで、戸
惑いもなくまた笑った。茶色く変色した前歯が大野ににやりと返事
をする。

「してやれってか」

「してやれ」

大野が女に、誇らしげに言った。

弟は、自分の下心が見透かされた恥ずかしさに顔を赤らめたまま
だった。だがその赤みは、彼の手が女に突然握られたことで、更に
血色を増す。

「え、なんです……」

消え入りそうな語尾で弟が言うのを、大野は小さな微笑を返事に
変え小さく頷く。

「元氣い」

女が弟のズボンを見てはにかんだ。

「お前勉強ばっかじゃつまらんだろ。宿題なんてあとで帰ってしな」
そう言うとき大野は、二人に背を向けて歩き出した。後ろから聞こえる弟の小さな呼びかけにも笑いながら応えるだけで、歩き去ってゆく。

なんだか不思議な気持ちだった。昔から弟の事は可愛がっていた。自分が何かを彼に働きかけたことも何度となくしてきたような気がする。一緒に遊びもしたし、喧嘩もした。その際には自分から謝りに行った。しかし最近になって大野は思う。自分のしていることや自分を取り巻く環境に、弟が興味を持ち出していると。そう感じてから彼の弟に対する接し方も、形をゆっくりと変えようとしていた。

多感な時期だからこそ、弟もいろいろなものに刺激を感じ、それを求める。そして、そんな弟の気持ちを知っているからこそ、大野もその手伝いをしてやりたくなる。おかしくない話だ。彼らが兄弟である以上、そこに家族愛が芽生えて不思議はない。正常なのだ。シンプルだが、大野が充足を感じるのはそういう事だった。だから、弟が何か一步を踏み出す事に関われた事、自分が背中を押した事に高揚や満足を感じる。

自分のようになればいい。そうすれば、お前も自分の世界が手に入るぞ。そう、俺のようにだ。

そうだ。お前を、兄貴に紹介してやろう。一端の人間になれた時、お前と俺でコンビを組むんだ。兄貴のところで必要とされるような、名コンビにでもなればいい。誰もが恐れるあの二人が、実は兄弟だったなんて、面白いと思わねえか。

毎夜のように、そう考えるようになっていた。考えることが面白かった。実際にそうなれば、どれだけ面白くて、今の何倍くらい生活が充実するだろう。

あの弱い親達のもとにおいては、自分がだめになる。何も得られない。底辺のような生活しかできない。アルコールに溺れ、女を殴る父のどこが強いのだ。それに黙って服従する母の、どこが強いのか。俺はあいつらとは違うんだ。

酒にも頼らない。自ら集団に飛び込み信頼を集める。俺が頭を下げるのは服従ではなく忠誠だからだ。

大野の考えはどんどん加速していった。地元を取り仕切る愚連隊にその腕っ節を見込まれていた彼は、その中に飛び込んで実力をつけた。それは、自らの家庭からの脱却と言っ意味もあれば、反抗という意味もあつた。まだ青い大野に出来るささやかな抵抗だったが、大野は気がついていて。自分は、明らかに強くなっていると。

「お母さん、買って来た」

お使いに出かけていた弟が言っていた。

無垢な弟。服従する事しか知らない人間に、使われている無垢な弟。

駄目だ。このままでは、あの男は弱くなるばかりだ。

その時、彼の中ですべての利害が一致した。

仲間に弟を引き込むことは、自分だけではない、あいつのためにもなる。

初めこそ悩むべきところもあつた。しかし、その結論に至ってから、靄は完全に消えた。その思考が彼を確信させ、ついに行動へと走らせた。

「おい、お前に話があんだけど」

それは、よく晴れた土曜日の午後の事だった。忘れもしない。あの暖かな陽射しの下、自分のバイクの置かれた自宅のガレージに大野は弟を呼び出した。改造されている機体にはアタツチメントがたくさん施されている。しかしボディはよく輝いていた。そこに、兄弟の姿はしっかりと反射していた。

「何？」

純粹そうな、しかしすでに何か味をしめた顔付にもなっている弟が聞き返してくる。

「あんな、お前にいい話があんだ」

その時だった。大野の耳に大きなクラクションの音が鳴り響いたのは。

とつさにブレーキを踏み込んだ。しかし、何の異常もない。クラクションは対向車線のトラックが鳴らしたものだ。自分とは何の関係もない。そして気がついた。自分が、かなり意識を別に持っていたまま運転をしていたことに。

「危ねえ」

幸い、後続車は無かった。大野の急ブレーキに事故が起ることには無かったが、運転への集中が別にあった彼には、その事故の起こる判断さえ出来ていなかった。

追憶はかき消され、後に残ったのは、妙に高鳴る心拍の鼓動だけだった。彼は目を覚ますように、まばたきを繰り返すと、アクセルを強く踏み込んだ。一瞬、うなりをあげたエンジンが夜のアスファ

ルトを揺らす。

月島圭子は拒むだろう。

彼女の父であり、自分の親でもある月島哲の言っていた様に、外部の人間が動き出しているのなら、次にその魔手が伸びる可能性が高いのは彼女だ。

月島の自室で交わされたように、そういう事態であっても、組のために月島は大野を組内に留めておく必要がある。それは、大野自身が説いたものだ。

大野はハンドルを大きく切った。やがて目的地が見えてきた。自説を裏切るわけではない。それはそれ、これはこれ、なのだ。出かける間際、彼は自分に強くそう言い聞かせておいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4284v/>

雨がやまない

2011年12月19日18時52分発行